

---

# 呪われてる王子様。

眠井

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪われてる王子様。

### 【Nコード】

N8072Y

### 【作者名】

眠井

### 【あらすじ】

呪われてる王子様と呪いを解こうと奮闘する歌えない吟遊詩人の話。

ハートフルボツコメディ目指してます。

一応、残酷描写予定のありのため、注意をつけましたが、人死の予定はありません。

私が見たものを表現するのは、少し難しい。

王城の東側に位置する王子の私室は、広いのに驚くほど殺風景だった。

数少ない家具も元は上等なものようだが、今では無数の傷がつき、見る影も無い。

殺伐としたこの部屋は、持ち主の心象風景そのままなのだろう。

敷物すらない床を眺めれば、まるで獣が暴れたようなひび割れだらけだ。

しかし他にも部屋も廊下もきちんと整備されていたし、

ここの部屋だって、別に地下牢でも監禁部屋でもないのに。

目の前で長々と話し続けていた声が止まった。

肩を押され前へ押し出される。

「海を越え、遙か彼方からやって来たと自称しておりますので、殿下の無聊を慰めるのに少しは役には立つでしょう」

面倒で下げていた頭を更に低くし、うやうやしく口上を述べる。

ここら辺は、飯の種なので手馴れたものだ。

「私は各国を巡りまして、様々なものを見聞しております。このよ  
うな声ではありませんが、様々な物語を存じておりますし」

大事に抱えていたリユートを少し鳴らす。

「歌や踊りに相応しい音楽を数多く学んでおりますので、お楽しみ  
いただけるかと」

返事の代わりに重い溜息。

浅い、せわしない呼吸音が気になり、顔を上げる。

王子、と呼ばれているだけあり、着ている布地は上等なものだ。

黒と灰を基調としている・・・若い男にしては老熟した服装だと  
思うが。

目許は落ち窪み、頬はこけ、顔色は服の色とあいまって黒っぽい。

あまり具合が良くなさそうだが、何の病だろうか。

答えはすぐに出た。

服から形が浮く足がどう見ても尋常の太さではない。

細すぎるし関節の位置もなんだか妙だ。

以前、居た隣国で聞いた噂話が信憑性を帯びてきた。

この国の王子は、魔女に呪われ、怪物のような姿をしている。

王子の成人祝いの席で、招待された魔女を怒らせ公衆の面前で呪われた姿にされ、

王は国中どころか近隣の学者、賢者、魔女の類を呼び寄せ、呪いを解いたものに莫大な褒賞をとらすと触れを出したが、呪いは解けず、それどころか新しい試みをする度に呪いの種類はかわり、呪いは今でも王子の身を苛んでいる　と。

事実だったようだ。

ところで、私を連れてきた大臣は、骸骨のような、いかにも演劇に出てきそうな悪役的風貌をしている。

ちなみに大臣の奥方は、往年は大変な美女であった事を思わせる風貌だったので、ギャップが激しい。

にもかかわらず、大臣は思わせぶりな台詞も言わず、胡乱な返事をする王子をよそに、私にしっかりやれといいつけ部屋を出てしまった。

何の含みもなく、事務的な話しかなかった。

まったく、古典的なほど演出的容貌に優れているのに

なんとということでしょう。

コレでは面白い話にならないではありませんか。

とはいえ、この国は大陸の大半を配下に収めている帝国の配下にあるような小国。

城もそれほど大きくなく、地方領主といってもいいくらいだ。

そんな野心があれば、とくに他の国へ行っているのかもしれない。

あれこれと思索していると、王子から声が掛かった。

「もう用は無いから、帰っていいぞ」

「どこへ？」

王子は、喋るのも億劫という様相。

慌てて椅子を引っ張ってきて勧めると、崩れるように座り込んでしまった。

大臣の前なので、見栄を張っていたのか。

辛そうに呼吸をしている王子を見ているのも忍びなくて、リュートの弦を指の腹で撫でる。

攫われて数年、奴隷として過ごして故郷に文を送った事もあったけど、なんの応答も無く望みは潰えた。

毎日の稼ぎが足らなくて殴られる日の方が多くなってきたから、もうすぐこれも取り上げられる事になっていて

あの時、あの街角で大臣の馬車の車軸が外れなければ・・・

「私は大臣様にお買い上げいただき、王子様のお傍に仕えるよう申し付けられておりますが」

王子は一瞬瞑目し、息を吐く。

「この国は奴隷制度を廃止している。よってお前は今から自由の身だ。家に帰るといい」

王子の瞳の色は黄色い。

見世物として檻の中で諦めたように蹲っていた狼の瞳と同じ色。

髪は白と灰色が入り混じった不思議な色合いをしていて、肌は少し白味が多い。

きつとずっと部屋の中にいるからだろう。

あの狼は、二日後死んだ。

「そうおっしゃいましても」

今着ている服だって、大臣、というか奥方と侍女が見かねて用意してくれたものだ。

「大臣様のご好意もありますので、いかがでしょう。数ヶ月、いえ、数週間お傍で仕えさせていただきませんか？」

私にも見栄があるから、銅貨の三枚しか持っていないとは言えない。

ここで追い出されても右も左もわからないこんな山奥の小国では、日銭を稼ぐのも一苦労だ。

奴隸のままなら、一応衣食住は保障されていたのだけど。

いや、そうでもないか。当初はともかく、この半年ほどはひどいものだった。

「わかった。そうしよう」

大臣の機嫌を損ねるのは問題だと王子も気がついたらしく、あっさり許可が出る。

確かに安くはない金を払って娯楽を提供されたのに、いきなりでは善意も台無しだ。

王子はとても疲れている様子なので、私はお茶をもらってききます  
と行って外へ出た。



## 1 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。こんな感じで行く予定ですので  
よろしくお願ひします。

部屋の外でうろろろしていると、女中らしい淡い色のエプロンドレスの少女を見つけた。

軽く自己紹介をして、調理場までの案内を乞う。

幸い、まだ忙しい時間帯ではないらしく微かに話し声が聞こえた。小間使いに礼を述べ、声を掛けてから中に入る。

恰幅の良い中年男性は、理長だろうか、それから同年代くらいの女性、幼い子供が二人。

おそらく火番か、雑用係だろう。

眼を丸くしている四人に軽く挨拶と自己紹介をしてから用件を述べる。

「王子にお茶と、何か食べ物をもって行きたいのですが」

「王子に!?!」

がたんと椅子を鳴らして、女性が叫ぶ。

ちょっと、びっくりした。

長々と調理場で拘束されてから部屋に戻ると、王子は疲れた様子で椅子に腰掛けていた。

隣には侍女が立ち、お茶の準備をしている。

なんか、部屋が豪華になっていますよ?

どこから持ってきたのか、あの殺風景だった部屋には花が飾られ、更に洒落たテーブルと椅子、ソファークッションも絨毯も完備されている。

さすがに壁にはまだ何も無いけど……。

圧倒されつつ、両手に持っていた盆をそつと下ろす。

これでもかと盛られた果物と甘そうなお菓子、焼きたてのものもある。

お茶を優しげな顔をした侍女が、嬉しそうな顔をして私にも勧めてきた。

良いのだろうか和王子を見ると、椅子を示してくれたのでありがたく腰掛けいただく。

この準備をする為に調理場で長く待たされていたのかと納得。侍女は、物凄くいい笑顔で食べ物王子と私に取り分けてくれた。

予想以上の高待遇……あ、いや、もしや毒見では無いだろうかと思いつつ、湯気を立てている平たいパンを二人の顔を確認してから食べる。

ふわふわして、美味しい。

網目状に焼かれている丸い菓子は、表面がさくつとして中は甘い。

干し葡萄に、……細かい袋状の赤い果物。

売られているのは見たことがあるけど、食べるのははじめてだ。人心地ついた所で、王子を見るとじつとこちらを見ていた。

……やはり、毒見だったのかと思いつつ、残り僅かになった果物を飲み下す。

「どうだ？」

「どれも物凄く美味しいです！」

予想以上に語尾を強調してしまった。

笑みをこぼす二人に羞恥を覚え、顔を俯かす。

「蜂蜜をかけると、もっと美味しいですよ」

そう侍女は言つと、私の皿に平たいパンを追加し、王子と私の皿のものに蜂蜜を掛けた。

さすが王宮だ。蜂蜜も透き通っていて、高級品である事が伺える。甘さで口がとろけそうだ。

「王子、凄く美味しいです食べなくては損です！毒は入っていません！」

つい余計な事まで言ってしまったけど、口の端が緩んで仕方ない。

こんな美味しい食べ物は何れ位ぶりだろう。淹れたてのお茶のなんて香りの高いことか。

王子は手元の皿を眺め、手をつける様子がない……なんということでしょう。

「さめたら美味しさ半減ですよ？さあ、どうぞ！」

そういつて、私はフォークを差し出した。

王子より先に食べる方が失礼だと気がつくのは、その少しあとの事である。

空っぽのお皿を片付けるのを手伝い、侍女と調理場まで行くと色々な人から背中や肩を叩かれた。

今までこんなに歓迎された事があつただろうか。否ない。

こんな大勢から一度に親切にされるなんて・・・後で悪い事でもあるのではと思つてしまい、自分を戒める。

部屋を案内され着替えなど用意してもらい、ついでに細々とした説明をつける。

日の当たるいい部屋だそうなのでありがたい。

当然ながらベットと机だけの小さな部屋だが居心地は良さそうだ。リュートを置き、周囲を見回すと日用品と数枚の服、それに一輪の花が飾られていた。

淡い黄色の花の心遣いに、胸が熱くなる。

王子は呪われて以来、滅多に部屋から出てこない。

料理長達の話によれば、以前の王子は親子関係は良好、学友である騎士達とも仲がよく、社交的で、国民にも慕われる人物だったそうで、呪いを受けてから、人の目を恐れすっかり引きこもり、呪いをとく為にさまざま・・・奇妙な薬や液体を飲むとか、をした結果、食事も喉に通らなくなつてしまつたらしい。

奇妙な液体や薬に関しては、注文を受けた副料理長がげんなりとした表情で教えてくれたのだが、あまり語りたくは無い。

体が不要と判断したから出したものを取り込む理由が思いつかない、とだけ言つておこつ。

特にここ何ヶ月は殆ど食事をとらなくなっていたそうで、だから料理人達はああいう対応だった、らしい。

私は確かに王子の良い憂さ晴らしになったようだ。

夕食の刻限までふらふらと城の中を歩き回り、場所の把握に努める。

あまり大きな城ではないので、注意していれば、初めてでも迷う事はない。

地味で質素、だが手入れは行き届いているので居心地がいい。

使用人達の顔も卑屈な感じはしないので、治世がいいのだろう。

ほどほどで切り上げるべきだと判断し、リユートの位置を微調整しながら廊下を歩いてみると、前からお仕着せ姿の若い男性が物凄い勢いで歩いてきた。

背、高いなあ・・・目が合った。

「あッ楽士！」

カツカツと勢いよく詰め寄られ内心少し、引く。

黒を基調としたお仕着せに浅黒い肌に短い濃茶の髪が剣山のごとく突き立っているの、あまり勢いよく来られると軍馬に寄られるみたいだ。

「なんでしょうか、えー・・・」

「クラウディオ王子の従者を務めるアダンだ。王子に関することから何でも俺に訊け！訊いて下さい。むしろ俺が訊ねたい。どうやっ

て王子に食事摂らせたんだ!？」

両手を掴まれ勢いよく上下に振られ困惑する。

「そんな大層な事じゃなくて、お茶頂いて私と一緒にお菓子を食べてだけで・・・」

「なんだつまらん」

いきなり手を離され、バランスを崩してよろめくと、襟首を掴まれた。

「ドジだなあ、お前」

なんだろう、この気持ち。

「楽士、お前もちゃんと食べてるのか？よし、一緒に食べに行くか」

勝手に自己完結しましたよこの人。

小動物のように襟首を掴まれずる引つ張られる私を、通り過ぎる使用人達は生暖かな眼差しで見守っていた。

見てないで、助けて。

結局、あのあとほぼ一晩中、従者アダンによる王子自慢され、情報収集の代償に睡眠を削られふらふらしながら水場に行くと、あの優しい笑顔の侍女が心配してくれた。

彼女の名前は、ベル。

榛色の瞳に穏やかな性格で、あまり口数は多くないようだ。と思うのは、アダンさんの口数が多すぎるせいだろう。

比較対象、間違えた。

「悪い人じゃないんだけど、ちょっと暴走するのよね」

そういつて笑う。

私も曖昧に返し、城門の方から現れた騎馬姿に眼を凝らした。朝の警邏だろうか。

泥だらけの馬と泥だらけの兵士が最後尾についている。

馬は暴れ足りないのか、手綱を持っている方は振り回されて大変そうだ。

なんとなく、連想が繋がる。

「なんか、馬みたいですね」

「ホント、馬並みのよね」

顔を赤らめて言われても、困るんですけど。



美味しい朝食を食べ城内を散策していると、例によってアダンさんに遭遇し、今度は王子の部屋まで連れて行かれた。

執務中に大人しい曲でも奏でているという事らしい。

机に書類を載せ黙々と仕事をしている王子を邪魔しないよう、端っこに椅子を寄せ、『白い犬とワルツ』という曲を爪弾く。

王子の横に立ち、書類に関してあれこれ説明している事務官らしき男性・・・名前は後で聞いておこう、が軽く頷いたのでそのまま続ける。

激しい曲ではないから、邪魔にはならないだろう。

最後の調べが終わり顔を上げると、人が増えていた。

みなさん方、お茶を片手にお菓子を食べている。

「次はもっと華やかな曲がいいな。『黄色いネズミ』とか」

一時期流行した子供受けする曲を上げるアダンさんに、ベルさんがそれなら『風谷の姫君』がいいと異議を唱える。

事務官は机の上を片付けながら、『最後の夢』を聴きたいと控えめに主張。

王子は面白そうにこちらを見ている・・・。

「大臣は良い掘り出しモノをしてくれたな」

思いがけない言葉に頬が熱い。

ベルさんが手招きしてくれたのでテーブルにつくとお茶とお菓子をお勧められた。

「歌も聴きたいよな、その喉は、一体どうしたんだ？変声期？」

王子はお茶しか手にしていないので、私もお茶だけにしておこう。

「怪我です」

指まで折られなかったのは、幸いだった。

「お医者さんには診てもらった？治るの？」

ベルさん、顔近いです。

「象牙の船と銀の櫂があれば治るでしょうね」

あのしみつたれが医者に連れて行くのは、余程稼ぐ見込みがなければまずありえない。

風邪をこじらせ、翌日には冷たくなっていた姿は忘れられない。

ああ、本当にいいお茶だ。

あの子にも、飲ませてあげたかった。

王子が一人になりたいというので、私達は部屋の外へ出た。

例によってアダンさんに引っ張られ、衣裳部屋へ向かう。

従者とは、王子の服を揃えたり、食事の手配や本人の要望を叶えたりする何でも屋、らしい。

お付の侍女みたいなものだろう。

もつすぐ収穫祭の時期なので、寒さに備えたものを用意するのを

手伝うのが、どうやら私の仕事らしい。

まあ、いい。

暖かな衣裳部屋で、衣裳係を呼んでみんなであれこれと物色する。王子には、暖色の服が必要だと力説したが、あいにくどれも暗い色合いばかりなので、後日仕立て屋を呼ぶ事で決着をつける。

ついでに王子の母、今は亡き女王の時代に居た吟遊詩人が使っていたという上等な服や羽根飾りのついた帽子、先の尖った靴などを見せてもらう。

どうやら随分体格のいい人物だったらしく、アダンさんが着ても横幅が余るので仕立て直して貰える事になった。

つまり、しばらくは用意してもらった小姓用の服のままだ。

貴人に仕える小姓の服だから、仕立ては良いし実用的なので私はこのままでも構わないのだが。

そう言うと、アダンさんは口をへの字にした。

「もうすぐ色々な所からお偉いさんが集まってくるだろ？その時に、小姓が楽器持つてうろついてたらサボってるように見えるだろうが」

確かに。

私が納得していると、衣裳係が不満そうな表情になった。

「個人的には可愛いからこのままで全然構いませんけど！てゆうか！ここやっぱり潤い足りません。なんとかして下さいアダンさんっ」

たくさんのお衣裳を抱えた女中達がいつせいに頷く。

「王子に小姓とか見習い従者を仕えさせるように伝えて下さいよ。」

騎士見習いはみんな巡回訓練行ってるし、つまんないです」

「巡回訓練？」

朝方見た騎馬隊の事だろうか？

余程不思議そうな顔でもしてたのか、女中達が競って教えてくれたところによると

始まったのは三代ほど前の女王の頃、元々山岳部族の寄せ集めであるこの国は、帝国が戦をする際には兵士を召集し出兵するのだが、山々に散らばり集落単位で生活する人々から召集するのは、困難な事だった。

何故なら遊牧をする部族あり、占いによって住む地を変更する部族ありで、同じ場所に留まっている可能性が低く、山を降りてこなければ知らせひとつも届かない。

それだけではなく、疫病が流行し集落どころか部族ごと全滅しても、誰も気がつかないという事もありえた。

それらを防ぐ為、騎士複数、医者に教師、ついでに商人が小隊を作り、定期的に各集落を巡回し知らせを持って行っているそうだ。

教師が居るのは、部族ごとに言語が異なるため共通語として帝国語を使っているのだが、帝国語が出来れば出兵しても生存率が上がる為らしい。

例えば、部隊はおおむね出身国ことになるが、戦場ではぐれた場合、言葉が通じない辺境部族兵の帰還はほぼ絶望的だ。

最悪、帝国領土内で敵兵として殺されかねない。

「医者もそりゃ帝国帰りつてワケじゃないけど、産婆が居ないような小さい集落には十分だからな」

そして騎士が居れば、危険な獣や山賊に対する行動が取れる。

「女王様凄いですね」

素直に感嘆すると、私以外全員が一斉に誇らしげな表情になった。

「ウチの王様達は凄いんだよ。ちゃんと俺達の事考えてくれてるし、帝国の奴等みたいに嫌味じゃないしな」

アダンさんも兵役の一環で帝国へ行った事があるそうだ。

確かに帝国は身分制度が厳しく、このように大らかな人々には居心地が悪かったのだろう。

歓談していると、女中頭にサボるなど怒られ衣裳部屋を追い出された。

事実なので平に謝る。

アダンさんとふらふらと歩いていると、暇なら手伝えと言われ調理室で芋の皮を剥く事になりかけたが、指を怪我したら困ると言うのと銀食器を磨く事となった。

これも従者の仕事に含まれるのかと訊ねると、そんな訳がないだろうと応えられた。

「王子が部屋に引き籠もってる限り、客は来ないし、俺の仕事なんかほとんど無いんだよ」

自嘲的な表情でそう言うと、スプーンを「ごしごし」と磨く。

「呪いを掛けられたあとはみんなで色々試したんだ。魔法使いや賢者っていろいろを帝国から呼んだりして、けど全部無駄だった。乙女の口付けってのも試し・・・ベルの妹に小遣いやって頼にしてもらっただけだから、そんな眼で見るなよ」

私は息を吐いてフォークを手に取る。

磨き粉の臭いが鼻につく。

「そういえば、王子の呪いって解呪が失敗するたびに変わると噂では聞きましたが、本当はどうなんですか？」

あの服から浮き出る異様な細さを思い出しながら訊ねると、アダソンさんは複雑そうな表情になった。

「最初は、本当にバケモノの姿になったんだ。下半身だけな」

「半分だけ？」

痛々しいものを見る表情を浮かべ、手元のナイフを磨く力を込めている。

「その時は祝いの席だからって、大勢居たどっかの貴族とか領主とか国の使者とか、みんな悲鳴を上げて王子から逃げた。王子の婚約者は失神してたよ。」

そのあとすぐ、婚約は解消された。あの日は、あいつの誕生日だったのに」

悲しそうにそう言った。

「招待客の魔法使いが呪いを解く呪文を使ったら、今度は下半身が熊そっくりになって、司祭が祈りを捧げたら馬になった。」

魔女はそれを見て大笑いして正門から歩いて出て行った。一生忘れられないだろうな」

夜半、食堂で演奏していると、険しい表情を浮かべたベルさんがやって来た。

王子に呼ばれているのだろうかと思っただが、そうではないらしい。

「王子の近くで、『三日ぐらいご飯食べてません』という顔してご飯食べてくれればいいから」

「さ、さつき晩御飯頂きましたが・・・」

予想外の言葉にどきまぎしていると、笑顔のまま両肩を掴まれる。

「『三日ぐらいご飯食べてません』という顔して、王子と一緒にご飯食べてくれればいいから」

ガクガクと頷くと、ベルさんはブーイングする聴衆を舌打ち一つで黙らせた。

「じゃあ、行きましようか」

私はこの城に居る間、ベルさんには逆らわないようにしようと思っただ。

王子のメニューは病人食で品数は少ないが美味しそうだった。色彩鮮やかな粥に蒸し肉、食欲をそそる野菜スープ。



なぜか同じものが私にも供される。

訝しげな表情を浮かべる王子に、私はこう答えた。

「王子がこれからお食事だと伺ったので」

王子は気の無い様子で肉を少し口に運び、手を置こうとして私を見た。

いつ見ても狼のような瞳だ。

王子がスープを口にしたので私も少し頂く。

礼儀、らしい。

主人より多く食べてはいけないし、先に手をつけるのも良くないとか。

「美味しい。ここの料理人は本当に料理が上手ですね」

王子は複雑そうな表情で給仕に徹するアダンさんを見た。

アダンさんは無表情で王子を見返す。

王子が粥に手を出せば、私も肉を少し食べる。

空になった二人分の皿を片付けるアダンさんの後姿は、実に軽やかだった。

食事を終えて疲労した様子の王子に夜に相應しい曲を静かに演奏する。

二人だけというのも、少し気詰まりなものだ。

本来はベルさんやアダンさんが居るべきだが、二人も疲れているようなのでいざとなったら誰か呼ぶと約束したのだ。

「食事をするのが嫌いなんですか？」

王子は顔を上げ、短く息を吐いた。

「そういうわけではない。ただ」

呪われた半身を見つめる表情には諦めが混ざっている。

「肉を食べれば獣に近づくような気がするし、野菜を食べれば家畜になるような気がする」

私は納得し、指を止めた。

「私の知っている限り、食事によって呪いが進行したり変化するということはありません」

食事行為で呪われるという事はあったが。

「王子、私はこんな声ですから歌う事はできませんが、知識はあります」

王子は苦く笑ったが、私はそんな風に笑う姿を見るのは嫌だと思っただ。

なんと云えばいいのだろう。

沢山の歌や詩は知っているのに。

調理場から貰ってきた酒瓶をテーブルの上に置き、杯になみなみ

と注ぐ。

「王子、お酒を呑むのは人間と龍だけですから、大丈夫です」

自分用にもたっぷり注ぎ、一気に飲み干す。

酒場で歌っていた頃は、エールが代金代わりだったこともあったな。

もう一杯飲み干す。

いい感じに気分が高揚してきた。

頭の中の知識を総ざらいする。

「基本的には、呪いは口付けで解けます。他にもありますがかなり特殊ですので、多分違うはずですよ」

恐る恐るといった風に葡萄酒に口をつける王子に断言する。

「もしかして、お酒も久しぶりでしたか？」

頷く顔は、少し嬉しそうだ。

「無垢な乙女のキスは、駄目だったんですね。確か」

処女には、魔法に対する抵抗力があるといわれている。

一角獣が乙女にしか懐かないのは、彼らも魔法を拒絶する存在だから、という説が有力だ。

「あとは、身分のある人つまり王族ですが」

そもそも王族というのは、神の血筋を引くと言われ、王の手で触れられれば病が治るなどの説もある。

王による施しで病が快癒したという話は、真偽はともかくとして  
良くある事だし。

そう言つと、王子は嫌そうな表情を浮かべた。

「叔母上と父ならもう試した。身分的には姫と王だ。それ以上は、  
もう確認できないだろう」

「もしかしたら、血族は範囲外かもしれませんが、あとは」

王子は天を仰ぎ嘆息する。

「みなまで言うな。それらに関しては、どう考えても無理だ」

王子も同じ事を考えたらしく、重い諦めが部屋に立ち込めた。

王子に他国の王子のキスを期待するのは、困難だろう。  
せめて王子が姫なら可能性はあっただろうが。

あとは、

「婚約者が居たとは伺いましたが・・・他には居なかつたんですか  
？」

今は憔悴して無残なものだけど、元々の造りは悪くないし性格だ  
つて悪くない。

隣国では嫡子以外が多くて、大変なことになっているそうだから、  
王子にも相手がいないと言う事も無いのではないかと思う。

王子は何も言わずに杯を空けたので、王子と自分のお代りを注ぐ。

「婚約者は、宰相の娘だったか歳が一つ違いでな。大臣の息子とア  
ダンの四人で幼い頃からいつも一緒だった」

悲鳴を上げて失神して婚約破棄した人か。

重すぎて何も言えず、黙って葡萄酒を味わう事に集中する。  
ああ、鼻を突き抜ける清涼感。

コックが自慢するだけがある。さすがこの国の名産品だ。

「俺など、どうなるうが構わなかったのにな。半端に呪いが解けるからこのざまだ」

自嘲的な笑い。

「叔母上は、今どこにいらっしやるんですか？」

慌てて話題を変えようとしたが、王子の表情は更に荒んだ。

「どこだろうな。呪いを解く方法を探すといって出奔したきりだ。  
王位を継ぐのも、子供に王位を継がせるのも嫌らしい。確かに、何もなければあの人は自由に暮らせたはずだからな」

う、酒瓶が空になってしまった。仕方ないので次のを空け、王子にも勧める。

「えと、王様に新しいえーっと、お嫌でしょうけどあの側室といいますが、あの」

王様が居るなら、新しく世継ぎを作ってもらえばいいのではないだろうか。

王子の母である亡くなられてるお后様には、悪いが。

王子は酔いが回っているのか、ぼんやりと私を見つめ、ああと呟いた。

「そもそもこの国は、複数の部族で成立している。それらをまとめる事ができたのは初代女王で、彼女は恐るべき退魔の力を持ち合わせ、呪詛による疫病を尽く退け、紛争を続けていた各部族は女王を祭り上げる事で結束した」

王子は酔いと絶望で濁った黄色い眼を撫でた。

「代が経て退魔の力が薄れても、この特徴が続く限りは部族は今の協力関係を維持していくだろうが。それ以外の人間が王になれば、この国は終わる」

はつきりと言い切る。

「今、父が王位についてられるのは、叔母がまだ若いのと母の遺功だろう」

王子は自分で杯を満たし、一気に空けた。

「あの時に全身が蛙にでもなってしまうえば、叔母が継がざるをえなくなるし、父も要らない苦勞をせずにするだのに。薄れたとはいえ退魔の力によって半分しか呪いが効かないとはな。いっそ」

そんな顔をしないで欲しい。

私に出来る事は、何だろう、そう思いながら杯を重ね、夜が更けていく。

月がとても綺麗な晩だった。



目が覚めたら、牢屋だった。

城の地下だろう。薄暗く、ことりもしない。

ずきずきと痛む頭を抱え、しばらく体を丸め考える。

・・・水が欲しい。

重い体を動かして檻の縁にある古びた水差しから縁の欠けた木製のマグに注ぎ飲み干すと、少し落ち着いた。

リュートが無い。取り上げられたのか。

牢屋は乾いていて、他に人の気配もない。

牢番は、きつとあの扉の向こうなんだろうと予想する。

硬い寝台に戻り、寝直す事にした。

南京虫が居ない事を祈りたい。

でもなぜ私がこんなところに。

私に酒乱の気はないはずだ。多分。

あんな上等の葡萄酒を飲むのは初めてだったが・・・うん。ない。ない。

ガシガシと頭を掻いていて、帽子がない事に気がついた。嫌だなと思いつながら、髪を撫で付ける。



しばらくして、物音が近づいてきた。

聞き覚えのある声は、相変わらず騒がしい。

落ちて着いてきた頭痛が再発してきそうだ。

気持ちばかり身嗜みを整え待っていると、予想以上の大人数がやってきた。

一番背の高いアダンさんが目に入り、それから牢番なのか武装した兵士が二人、それからシックな装いをした中年女性に付き従う真面目そうな似たような服装の若い男女と・・・ドレス姿の十歳無いくらいの少女。

少女がこちらを見て走ってこようとしたが、兵士に抑えられ大暴れしている。

「アダンさん。私、何でここにいるのでしょうか、酔っ払ってご迷惑をおかけしましたか？」

返事の代わりに長い溜息が返ってきた。

「こちらにいらっしやるのは、宰相、こちらは御令嬢。こっちは二人は秘書と書記、あとお前が暗殺とか呪術とかしたら困るからすぐ手を打てる将来有望な兵士二人」

呪術を行うには名前が必要というのは割と知られた話なので、あえて伏せたのだろうと思った。

とりあえず頭を下げる。

「コレが昨晚王子の部屋に居た楽士です。リユートはこちらで預か

っています」

小刀や財布などは、隠しに入っているからまあいいか。

「王子に引き合わせたのは、フェルナンデス大臣ですね。夫人も顔合わせをしています。どうしますか？場所を移された方がいいと思いますが」

アダンさんが、有能に見える。

宰相は私を上から下までじろじろと見ると、兵士の方に軽く頷いた。

「良いでしょう。念の為、手が使えないようにして。空いている部屋で結構です」

もう一人の兵士は、未だに暴れる令嬢を捕まえておくのに手一杯なので、兵士が鍵を開けアダンさんが私の手首を掴んだ。

「仮にも楽器を扱う手です。自分が掴んでいます、いざとなればへし折りますので」

さらりと怖い事を言われたが、ウィンクを投げられ口を嚙む。下手な縛られ方をするのも嫌だから仕方ないだろう。

秘書と言われた若い女性の方が先頭に立ち、地下牢から出る。

「あとで説明されるから、そのまま大人しくしてろ。な？」

「わかりました」

私は一体何をしたのか、好奇心の方が勝ってしまった。

連れて行かれたのは、テーブルと椅子のある個室だった。

調度品は壁にタペストリーが一枚と、簡素といつかなんといつか・  
・シンプルなのはこの国の趣味なのだろうか。

宰相と書記は椅子に腰掛け、秘書は宰相の背後に立っている。

そして私はアダンさんと兵士に挟まれテーブルの前に立って、頭痛と吐き気を堪えていた。

「大丈夫か？顔真つ青だぞ」

「……二日酔いです」

絨毯の上でぶちまけるのだけは、避けたい。

体が揺れているのを自覚しながら、頭痛の原因のひとつに目をやる。

令嬢はまだ暴れている。なぜ連れて来ているのか……。

「ピアンカ、いい加減になさい。あなたが楽士に会いたいというので連れてきたのに、迷惑ですよ」

ピタリと少女の動きが止まったので兵士がそつと下ろす。

柔らかそうな金髪は肩の下ぐらいまであり、緩やかに波打っている。

瞳は薄い緑。肌は白く、そばかすが散っているが、随分可愛らしい少女だ。

宰相はプラチナブロンドで瞳の色は同じだ。

鷲鼻の母親に似ていくのだろうかと考えると、少し不思議な気分になる。

「ごめんなさい。お母様。けどこの人、エルフなのに髪の毛黒いんだもの。瞳だって緑じゃないし、肌もミルクみたいな白じゃないわ」

無表情の秘書と、机に向かって無表情を装っている書記の肩がピクリと震えた。

「なんで耳はエルフみたいに尖っているし、楽器も使えるのにそんな変な声なの？背だってお兄様ぐらいしかないし、でも瞳の色は真っ青でちよつと素敵ね」

私は肩をびくびくと震わすアダンさんを半眼で見上げた。

兵士と目が合うと、彼はさっと目を逸らし、こちらを見ようともしない。

耳が真っ赤ですよ。

「発言しても・・・？」

「どうぞ」

宰相から許可が出たので、私は出来るだけ落ち着いた声を出そうと努力した。

「お嬢さん、私は海の向こうの国から来た外国人です。私の兄弟姉

妹も両親も祖父母も両隣ン家も大体似たり寄つたりの特徴をした人間ですので、えろふというのと混同されては、迷惑です」

「えろふじゃなくて、エルフ！エルフはね、森に住んでて弓と楽器が得意で金髪碧眼で背もすらつとしていて耳が尖っているのよ」

「そんな人知りません」

「耳尖ってるじゃない！海の向こうでも森に住んでるんでしょ？」

「ウチの一族、先祖代々海辺に住んでるんですけどッ！？」

思わず母国語で言ってしまい、全員にきよとんとされた。

相手は子供だ。咳払いして、落ち着きを取り戻す。

「残念ながら、私は森に住んでいません。お話はここまでです。あ  
と他のお話があるそうなのでよそで遊んでください」

「わかったわ。じゃあ、またね。お母様、私先に馬車に行ってるわ  
ね」

そう言っつて素直に部屋から出て行くのかと思いきや、私の服をツ  
ンツンと引っ張った。

にやっと、小悪魔の笑い。

「じゃ、またね。森に住んでないエルフさん」

「だから違っつてー！」

反論は分厚い扉に跳ね返され届かなかった。

「さすが、フランススカの妹。ぶっちぎりだな」

アダンさんが呟くと、宰相が眉間にぎゅっと皺を寄せた。

「あの娘、最近上げた本にすっかり夢中になっていて、不愉快な思いをさせて御免なさいね」

意外な言葉に思わず首を横に振る。

「アレくらいの子供には良くある事です」

器量があまり良くないと思っていた宰相だが、微笑むと案外美しい人だと気がつく。

「さて、あなたには何点が質問があります。場合によってはそれ相応の刑罰が処せられますから、よく考えて答えて下さい」

真剣な声色に頷き、背筋を伸ばした

最初に聞かれたのは、夕食のあとの事だ。

隠す事もないので、調理場でお酒を貰い二人で飲んだ話を話す。

その際は副料理長が居たので問題はないだろう。

それから話していた内容は呪いを解く方法についてである事、美味しいお酒だったので飲み過ぎたと思っっている事、目が覚めたら牢の中だった事まで言うと、疑わしそうな表情を浮かべられた。

「他に魔法に関わるような事とかしませんでしたか？」

「酔って手頃な曲を弾いたかもしれませんが、素面でもないのに魔法に関わるような曲が弾けたとも思えません」

魔法の一種である魔曲が無いわけでもないが。

「あなたがエルフなら無意識に魔法を使ったという可能性はあるのかしら？」

「そもそもエルフというのが何かかも知りません」

首を横に振ると、宰相は秘書に目配せした。

「帝国で人気の演劇家が書いた本に出てくる種族です。魔法にも通じているとか。吟遊詩人なら半獣半人の種族に詳しいでしょう？」

「ケンタウロスとかでしょうか？ならばある程度」

そもそも楽器をもたらしたのは彼らだと言われている。今でも南東の一部で住んでいるというが。

「実在の種族に混ぜて創作の種族も出ているから、あの子が思い違いをしたのでしょうかね」

迷惑な話だ。

本音を堪え、首を傾げる。

「それで、私が何の関係があるのでしょうか？もしかして、王子の呪いが解けたんですか？」

「ええ」

さつきから背中がむずむずする。やはりあの寝台に虫が湧いていたのだろうか。

温泉に入りたい。

「えっ？」

「正確に言えば、王子の呪いが変わりました。誰かが呪いを解こうとしたのです」

喋っている表情に、微かな嫌悪が浮かんでいる。

「えー……お酒で呪いは解けませんよね？」

「だからあなたに尋ねているのです。呪いを解こうとして、呪いが悪化する可能性もありえたわけですからどんな事も確認しなくては」

王子殺害未遂疑惑を掛けられていたのか。

「申し訳ありませんが、私に思い当たる節はありません」

宰相は頷き、両手をテーブルの上で組み合わせた。

「あなたに非があるかと無かろうと、王子の呪いに関係し



ていた可能性があります。ですから、私は王家の人間とこの国のために、これから起こりうる悪い可能性は排除しなくてはいけません」  
つまり。

「こちらの都合ですし、個人的な償いもこめて少々包みました。馬車で隣国との要所まで送りますよ」

余計な事は黙って、さっさと出て行けと。

「わかりました」

食い下がる必要は、無いだろう。

「王子にご挨拶は」

「恐らく、誰とも顔を合わせたくないと思います。いつもそうです。呪いが変化した直後は」

アダンさんも複雑そうな表情を浮かべているので、それはこれまでの経験がそう言わせるのだろうと思った。

昼過ぎに出る事になり、多少荷物を纏める猶予をもらえた。

とはいえ、殆ど身一つ。

少ない時間を過ごした部屋を出て、王子の部屋まで向かうと、廊下でベルさんがお茶一式を持って肩を落としているのが見えた。

声を掛けると、アダンさんのように複雑な表情を浮かべている。

「せっかくご飯を食べて下さるようになったと思ったのに、部屋にも入れてもらえなくて」

「すみません・・・私が何かしたせいで」

酷い言葉を投げる代わりに、ベルさんは私の肩を叩いた。

「大丈夫。今までも何とかやってこれたし、あなたのせいじゃないわ。これから頑張ってね」

「はい」

頭を下げ、別れを告げる。

私は廊下に腰を下ろし、リュートを取り出した。

部屋に入れないなら、せめてこれくらいは。

長くも短くも無い別れの曲が奏で終わる頃、奇妙な音が聞こえ、思わず指を止める。

ずずっ　ずずっ　と、まるで何か大きなものが体を引きずりながら近づいて

背を凭れていた扉が内側に開き、私は王子の部屋に転がり込んだ。リュートを抱えたまま転がっている私と、見下ろす王子の目が合う。

「大丈夫か？」

「え、ええ、あの、王子のほうこそ大丈夫ですか？あのすみません私、全然覚えていませんが、呪いが変わってしまったようで、お加減の方はいかがでしょうか？」

じたばたと姿勢を変える。

「大変申し訳ありません」

「やめろお前が悪いわけじゃない」

土下座する私を起こそうと肩を掴む王子に、柄にも無く感情がこみ上げてきた。

「けどっ王子はあんなに沢山の方々に心配されて、大事に思われているのに！私のせいであつ」

「いやちがつっ！こら泣くなっちよっ！アダンっ何とかしてくれっ」

涙を止めようと、鼻を押さえる私の背後に長い影がさす。

「いーけないんだいけけないんだー 王様に言ってやるゝ 子供泣かしますかフツー王子なのにプフッ」

楽しそうな声色に嗚咽が止まらなくなってきた。

「アダン、何騒いで・・・王子、何をなさったんですか？」

「ち、違いまづ・・・私が・・・ひくっ・・・っ・・・」

泣くのなんて、何年振りだろうか。困ったな。

人の気配が増えているのが判り、落ち着かなければと言つ気持ちが中々固まらない。

「大丈夫？泣かないで。王子・・・子供泣かすなんて、最低ですよ。引き籠もりの分際で」

後半は小声だったが、ベルさんの声はばっちり聴こえてしまった。弁解しなくてはいけない。

「違います。王子は悪くないです。私のせいで、また別の呪いになっってしまったって、精神的に打撃を・・・ごめんなさい」

誰かが手巾を渡してくれたので、それで涙を拭く。

「でも王子の呪いが変わったのって、これで何回目だ？」

誰かの言葉に王子の体が強張るのが見えた。

扉の影で王子の姿は、彼らからは見ええないと思うが、何年も引き籠もっていたと言う話だから、

王子にとってはかなり大人数に感じるのではないだろうか。

何か言わなくては。

服の袖でごしごしと顔を擦り、なんとか涙を止める。

「あのですね、自分の体がよくわからないものに変わるって、凄く恐ろしい事だと思います。

自分の精神まで変化するんじゃないかと不安になったりとか、凄く勇気がある人でもないと、到底耐えられないと思うんです！」

よし言えた。

唾を飲み込み、王子の顔を見つめる。

「伝承などでは、本当は心までは呪われていないのに自暴自棄になっただけ結果、心まで怪物になっってしまう人物もいますが、王子はそん

な人ではありません！

凄く優しいし、国の事もちゃんと考えていらっしやるし、王様や叔母上の事も心配してるしっ超いい人なんですよ！呪いなんか全然負けてないんです！」

一気に言い切って、息を吐く。

喉が痛い。

「王子の呪いは、いつかきつと解けますから、それまで諦めないで下さい」

それではお世話になりました。と言って、立ち上がるうとしたら足がもつれた。

手が空しく宙を搔く。

このままこけたらリユートが壊れる！とっさに抱え込み、顔面から床にぶつかると思いきやその前にもうちよつと柔らかいものに当たった。

べちっ という、割と間抜けな音。

鼻ぶつけた。

なんとなく違和感のある感触に思わずぺたぺたと触る。

鱗だ。丸太のような鱗のある長いのにシーツが巻きつけられ、見上げた先は、王子につながっていた。

王子は、呪いが変化して

「王子、今度は蛇になったんですね」

王子は無言で唇を噛んでいた。

「まるでナーガ族ですね、あの人達、超いい人ばかりですもんね。良かったですね」

思わず手を掴んでアダンさんのように上下に振る。

「良かったですね！犬とか猫とか牛とかだとコメント困りますが、山羊や蛇なら呪いというよりむしろ祝福ですよー！」

手を離してベルさんの手を握る。

「やりましたね！きつとすぐ具合良くなりますから！もしかしたら魔法も使えるようになるかも知れません！良かったですね！」

ベルさんの長い睫が上下し、柔らかそうな唇が動く。

白い顔が戸惑った表情を浮かべていた。

「そ、そーなんだ？」

ああ、そうか。ナーガ族はここからずっと離れた西方に住んでいるから、見たこと無いに違いない。

「ええっそんなんです！近所にも武者修行で来ていた人が居ましたが、超いい人でしたし！」

一人で言っていると、深刻そうな表情を浮かべた野次馬達が各所

で議論を始め、アダンさんはどこかへ行ってしまった。

後姿をベルさんで見送っていると、つんつんと背中をつかれ振り返る。

「あ、すみません王子、私そろそろ出て行かないと」

いけないいけない。

王子も戸惑った表情を浮かべ、困ったような口調で言った。

「さつきから話が見えないのだが、少し、待て。何故お前が出て行くんだ？」

話が、見えない？

「え、私が出て行くのは王子の呪いの変化した理由が不明で、可能性があるのは私が何かしたからで、もしかた何かやらかして王子の呪いが悪化したら困るからです」

王子は沈黙し、自分の蛇の下半身を見つめた。

「お前は、これを呪いではなく、祝福だといったじゃないか」

「そうですね」

「悪化してないな？」

「全然悪化してませんね。ウチの近所でそういう子が出たら一族総出で三日くらい大宴会です」

「お前に出て行くよう言ったのは誰だ？」

「宰相様です」

「ベル、執事を呼んで来くれ。ブランカ、アウグスト喧嘩をやめてこの体に合う服と移動用の椅子を。あと誰かアダンを殴ってきて良  
いぞ」

王子は私の頭を優しく撫でた。

「こいつを風呂に連れて行ってやってくれ。あと服もだ」

別人のようにきびきびと指示を下す姿をあっけにとられたままみ  
ていると、王子は優しい顔をして私を見た。

「ありがとう」

王子は笑うと大変な美形である事に、私は今更気がついた。



大臣の奥方 前編（前書き）

番外

## 大臣の奥方 前編

私はベガルデューモ神聖帝国から見るところのフス地方にあるルストウリアスという山々に囲まれた小さな国の大臣の伴侶をやっています。

ベガルデューモ神聖帝国というのは、このファン大陸の東部の大半を支配しているわけですが、皆様正式名称をめんどくさがって「ベガ帝」とか「帝国」と略してと呼んでいます。

話がずれました。

つまり、私の夫は小さな国の中間管理職として上に王様、宰相、下には將軍や事務方の人々などに挟まれ、トリガラのように絞られて生活しています。

元々は騎士の家系でありながら頭脳面のみ秀でていたので時の女王様が当時の大臣に口添えして下さり、養子として迎えられ、喜びのあまり大臣の書齋という名の個人図書館に半年ほど引き籠もり栄養失調で死に掛けたというあほな伝説を持つ可愛い人です。

何の因果か、息子達は祖父や伯父達そっくりの脳筋になってしまいましたか……。

食費が大変です。

ですが、優しい子達になってくれたので良しとしましょう。

そんな事を考えながら一人微笑んでいると、向かいに座り書類に目を通していた夫が、人によっては眼光鋭く、心の底まで射抜くような眼差しを投げかけてきました。

「奥方様は、随分と機嫌が良いね」

「ええ、今日の占いに『悩みが解決する』という卦がでてましたの。貴方に」

真つ赤になつて俯く年下の夫を眺められるのは私と隣に座る無口な侍女だけの特権ですから、存分に堪能します。

「いい腰痛のお薬が手に入ると良いですわね」

それとも、最近のご無沙汰のあちらの方かしら？などと私が考えていると、不意に馬車が傾ぎました。

市中の為、あまり速度は出していなかったとはいえ、それなりの勢いがありますので座席から滑り落ちた私に夫が手を差し伸べます。

私は微笑み、夫の手を握りました。

「何事かしら？」

「ジューガのいつもの嫌がらせかも知れないね」

我がルストウリアスの隣国、ジューガとは長年、外交テーブルの下で足を蹴り合う仲ですので、こつやつて会議の為訪れれば、適当に嫌がらせをされます。

もちろん、我が国にジューガの使節がやって来れば適度にお返ししますが。

「サリー、大丈夫？」

無口な侍女は私のドレスを軽く叩き埃を落としながらにこりと微笑みました。

「大丈夫です奥様」

こうい子さんが娘に欲しいわー。

と柄にもない事を考えしていると、御者がこちらに回ってきました。

「旦那様、申し訳ありません。車軸が折れてしまったようです」

御者がそう告げると、夫は仕事用の厳しい顔を作ります。

仕方なく、私は手を放しました。

私達の邪魔にならないよう大半の召使達は別の馬車で宿に戻っていますから、今日はもう宿へ戻るだけです。そう急ぐ事はありません。

厄介ごとは殿方に任せる事にし、私達は座席に戻り、カーテンを少し開けました。

下町の雑多な風景は、山がちなルストウリアスに慣れた目には珍しいものです。

窓を開けると、柔らかな音色が聞こえました。

季節にそぐわない、春の喜びを表す曲です。

音の主は

居ました。

しかし、この素晴らしい音色を奏でているのが本当にこの人物なのかと思わず目を疑います。

何日どころか何ヶ月も体を洗っていないであろう垢塗れの顔に、元の色もわからないような汚れた髪。溝で洗ったような衣類を身につけ、手足のほとんどは剥きだしのまま汚れ真っ黒です。

このような姿では、いかに素晴らしい曲を奏でようと客が寄りないであろう事は明白でした。

「ちょっとアナタ。何考えてるの」

返事はありません。

「リユートのアナタよ。ちょっと聞きなさい！」

「奥様」

あらいけない。

思わず声を荒げてしまいました。

しかしその甲斐あって楽器を弾く手が止まり、纏れた髪で隠れた

顔が左右を見ました。

「こつちよ」

まっすぐにこちらを見据えても、表情はほとんど見えません。

「季節を考えて、秋の曲にしなさい」

こちらに向けられた手のひらが妙に白くて目を引きます。

「白銅貨一枚でいいよ」

しゃがれた痛々しい声の中にどこか不思議な響きを持つ言葉が返ってきました。

「どこの出身でしょう？」

私は窓から身を乗り出し、半銀貨を見せると片手で手招きしました。

一瞬躊躇ってから近寄ってきたので硬貨を手の上に落とし、訊ねます。

「アナタどこの生まれ？この辺りでも南方でもないわね」

「西方の海を越えた所から」

帝国の国境は西は砂漠によって隔てられ、砂漠の向こうには興国という小さな国々の連合体があります。

その先へもつと行けば、大きな海があります。

帝国内部にもいくつか外海へ通じる小さな海がありますが、それらとは比べ物にならないとか。

話半分に聞いたとしても、相当遠方だと言つのは確かです。

「もしかして、腰痛に効く治療法とか知ってる？」

半銀貨と私の顔を交互に見て、雑巾の塊みたいな頭が傾ぎました。

「温泉、薬草風呂、湿布、按摩、針、あと話では、暖かい岩の上で体を休めるといいと」

さかんに裾を引くサリーに根負けし、体を馬車の中に戻すと珍しく彼女は困った顔をしていました。

「一応、身分の事などありますので」

そう、ここは我が国ではなく、身分制度やり過ぎてすべてにおいて末期的腐敗状態のジューガ。

そこで一応貴族の身分の私が路上芸人と普通に会話すると、厭味の種を生むだけになってしまいます。

でも・・・

「じゃあ、サリー伝言をお願い。夕暮れまでに石馬亭に私宛に来るようにつて」

ここからそんなに遠くは無いから、夕食までには色々話を訊く事ができるだろうという算段です。

それまでに、私も宿へ戻れるでしょうしね。

外では下男と御者と夫が顔をしかめているのが見えました。



## 大臣の奥方 後編

宿で食事を取っていると、涼やかな秋の曲が微かに聞こえてきました。

ジューガ料理は、数少ないこの国の美点です。

贅沢に使われた香辛料で複雑な味わいの真っ赤なスープ。

芥子の練りこまれたふつくらとしつつピリツと辛いパン。

食欲を刺激する香草と共に燻された子豚の丸焼き。

ただひとつ残念なのは、夫の好みではないことくらい。

今も眉間に皺を寄せ、パンを干切っています。

この人のこういふ子供じみたところも可愛いのよね。

傍から見れば、人相の悪い男が何か悪事を企んでいるように見えるのでしようが。

「この宿では楽士を雇っているようだが、ここには来ないのかね？」

分厚い扉に目をやり、夫が給仕に尋ねると給仕はふるふると首を横に振り、サリーと見習い家令が意味ありげに目を合わせているの

で、私も内心首をひねりました。

「あなた達、何か知っているの？」

二人が嬉しそうに微笑みます。

「外で一曲弾いてもらうよう手配しました。旦那様も奥様も音楽がお好きですので」

ここ十数日に卓上での戦争を潜り抜け、夫はまた少し痩せました。

今回この国に来て、初めてで、最後の二人きりの食卓です。

他人の居る前では、夫は理知的で冷酷に見える表情を崩さない。

だから私が代わりに微笑むのです。

「ありがとう。とても嬉しいわ」

つつがなく食事を終え、寛いでいると侍女がそつと耳打ちしてきました。

眉を顰め、思索してもよい解決法が思いつかず、夫に頼る事にします。

「貴方、夕食の時素晴らしい音楽を聞かせてくれた楽士をここに呼びたいのですけど、その子、身分の問題でここまで入れないそうなの。どうしたら良いかしら？」

あの芸人は。夕暮れ前にはここへ着ているはずでしたが、宿に入れず往生しているのをサリーが見つけた、音楽を依頼した。という事でした。

「そんな事か。ヘルマン、ここまで通してくれ」

「はい。旦那様」

見習い家令のヘルマンが一礼し部屋を出、しばらくしてボロ布の塊と非常に嫌そうな顔をした宿の亭主を連れ戻ってきました。

太った亭主は恐らく、汚されるのが嫌なのでしょう。

しきりにお世辞を述べつつ、物乞いの類を入れるわけには行かないが特別にということを重ねて強調してるため、侍女が小金を包み黙らせました。

しかし、夫も、あまりのボロ布ぶりにややおののいた様子でした。

しかも室内だとわかるこの異臭。

ヘルマンは平静を保っていますが、目元がやや引きつっています。

私は扇で口元を隠し、サリーを見やりました。

驚いた事に微笑んでいます。

「奴隷で、異民族なんだそうです」

帝国及びジューガ国では奴隷制度が存在しています。

しかし、国内に住んでいる今の若者達は、奴隷と言う存在を見たことも無いはずですよ。

今は亡き女王と私達で、廃止しましたから。

完全に。

そこまで考え、ふと漠然とした予感を感じました。

「貴方、この奴隷、買い取ったらどうかしら？腕が良いし、損ではないしそれに」

まあ、買い取っても奴隷は国内に入った時点で奴隷ではなくなるわけですが。

「私、曲の続きをもっと聞きたいわ」

あの頃　あの勇敢で凛々しい女王がいた頃、城には素晴らしいテノールを聴かせてくれる吟遊詩人と機知に富んだ冗句を口にする小柄な道化がいて、腕白な王子と女王を支える王の姿がいつもありました。

けして我が国は、富んでいるわけではありません。

資源といえば、鉱物と林業、少しの酪農、それでも何年もかけて私達は　人々が飢えないように、身を売らずに済むにする努力を続けて……。

そうやって良くなる矢先だったのに、春の前にカサンドラは逝ってしまった。

ならば、せめてカサンドラの大事な息子に、あの春の歌を聴かせてあげなくては

奴隷は案外安く買い取ることが出来ました。

帰国し洗ってみれば、異民族といえど、普通の子供とほとんど変わりありません。

耳が尖っているのは、部族の風習かもしれないと思いつねずにおきます。

実際洗った侍女、確かアマンドが言うには半日掛かりだったそうです。

鳥の巣のような髪を解すよりも、切って洗った方が早いというので、まるで厨房の雑用係くらい短い髪になったのもご愛嬌。

痩せた首元が寒々しく、息子達の為に仕立てたものの、成長に追いつかず数度しか腕を通さなかった秋物の服を着せると丁度よい具合です。

顔立ちも整っているので、どこかの貴族でもおかしくないふうに見えます。

小奇麗にした姿を夫に披露すると、珍しく困ったような表情を一

瞬浮かべました。

「少し、髪が短すぎでは？それにこの服は」

夫は、息子達は知らないかもしれませんが結構、子煩悩。

まさか服まで覚えていたなんて、

「もう着る人も居ないし、丁度いいでしょう？髪はちょっと切りすぎましたわね。サリーちよつと不器用だから」

本人は、夫と私を青い大きな瞳で交互に見つめるだけで口を閉じています。

子供とは思えないほどの落ち着きぶりです。

「あなた、下がっていいわ。またお願いする時はよろしく頼むわね」

「わかりました。奥様」

しゃがれた声だけが、本当に残念。

「吟遊詩人として色々な屋敷に出入りしていたみたいだけど、喉を潰されてしまって路上芸人に落ちぶれてしまったんですって」

複雑な経緯を省いた説明に、夫は軽く頷きました。

腕前に関しては、既に幾度か部屋越しに聞いているので何の反論も出ません。

「あの子、王子の傍に置いてみたらどうかしら？話した感じではあまり宗教心もないし、王子の話し相手にはなるとおもうの。少なくとも、城の人では遠慮するし、外国人でも帝国派ばかりでしょう？」

王子が魔女に呪われ喜んだのは、皮肉にも魔女を迫害する立場の教会でした。

古代から続く祖霊達を崇拜する部族の集まりである我がルストウリアス。

帝国に膝をつく立場である以上、帝国の国教であるジユニ教を受け入れてはいますが、教義が国の習慣法と異なる事に関しては習慣法を優先すると定めたのは女王でした。

当時の教会側の反発は相当なものでしたが、帝国内で内乱が起こった際、皇帝側で多くの手柄を立てた女王には何の咎めもなく。

しかし、その遺恨は、見えない形でずっと残っていたようでした。

不信者に下された天罰だと。

血で穀物を買うような獣のような国には、獣の姿をした王子が相応しいと。

何度となく、謗られ嘲笑されたか。

血統による求心力を持たない王と、呪われ身も心も弱っていた歳若い王子、亡き女王の妹で遊学中のアンヘリカ姫の三人しか王族は残っておらず。

アンヘリカ姫が婚姻相手を探しに行くとは出奔してから早二年。

ゆっくりと衰退していくこの国を手をこまねいて待つわけには、  
いかないのです。

何か変えなくては。

「明日、連れて行ってみよう。もし駄目でも、収穫祭のあとは冬だ。  
楽土が居れば、夜が短くなるだろう」

夫がゆっくりと頷き、話がまとまりました。

翌日、夫が出仕するのを見送ったあと、サリーが差し出したの  
は、一通の手紙でした。

「奥様、これあの子からです、字が書けないというので、私が代わ  
りに」

開くと、腰痛の様々な治療法、中には知っているものもありまし  
たが、ああ、そういえば、コレが知りたくてあの子を。

すっかり忘れていた自分に、歳を実感します。

しかし落ち込んで仕方がありません。

第一、悩むと皺が増えます。



「この薬湯呂はよさそうね。早速材料を用意して頂戴」

細々と指示していると、下働きの侍女が不安そうな面持ちでこちらを見ているのに気がつきました。

「どうかしたの?」

アマンダは複雑な表情を浮かべています。

「あの奥様、今更申し上げるのもどうかと思うのですが、あの」

ひどく言い難そうにちらちらこちらを見上げ、おもいきって口を開くと

「あの、皆様勘違いされているようなので、あの、あの子、あの、女の子なんです」

風で扉がゆれるガタガタという音が良く響きました。

風呂で汚れを落とす前に髪を短く切ったのはサリーです。

息子の服を用意するよう言ったのは、私でした。

奴隷の持ち主と話したのは夫でしたから、きっと知っていたに違いありません。

私とサリーは思わず顔を見合わせ、どちらともなく笑いだしました。

「とりあえず、このことは伏せておきましょうか」

「なぜででしゅっ？」

「決まっているじゃない。その方が面白そうだからよ」

王子が部屋の外へ出るようになって、十日ほどたった。

当初は、動き回るアダンさんの後ろについて出来る事を手伝っていたが、人材の手配が終わったのか、現在王子の背後には従者見習いとして二人の少年がついて回っている。

おかげで物の上げ下げにも複数の手が加わり、あまりやる事が無い。

ひたすら近くで品のいい曲でも鳴らしていようかと思ったが、一日やって飽きた。

誰もリクエストしてくれないし。

最近、朝起きて身繕いしてから調理場へ行つて手伝い朝食を食べ、片付けをしてから王子の部屋へ行き、朝食に付き合ひ、従者見習い達が来たら部屋を出る。

大体掃除か洗濯を手伝い、それから調理場へ行き、昼食用の冷物を準備を手伝う。

昼は時間が定まっておらず、使用人達用に食堂に用意されているので軽く食べて一曲していると、大抵アダンさんに連れられ王子のところへ行く事になる。

王子は書類を裁いたり、陳情を聞いたりするのに忙しく昼食を忘れがちなので、私がバスケットにたっぷり詰めて行かなくてはい

けない。

アダンさんが飲み物を、私がバスケット二つ、給仕が移動式食卓を押して、王子が大臣に囲まれてようが陳情のために人々が列を作っているようがとり合えず食事の準備をする。

移動式の食卓を王子の横にくっつけ、従者見習い達が書類を片付ける。

書記の筆も片付け、陳情の人々が居れば彼らにも軽食とグラスを渡す。

衛兵達は交代したばかりなので、我慢してもらおう。

書記は昔から仕えていたと言う中年の女性で指先がいつも真っ黒なので、お手拭を多めに用意しなくてはいけない。

全員に何かしら行き渡ったら、甘いゆるやかな曲を奏で、食事が終わるのを待つ。

一曲終わる頃には、朝から陳情する為に待っていた人々の表情も少しほぐれ、軽い笑い声すら聞こえるようになっていく。

概ね、財産争いや水利権、家畜の所有権、鉾山での待遇改善や事故、事件に関してや、果てには離婚問題で持ち込まれて大変だ。

場合によっては歴史家に学者、それに引退した事務官や古参の騎士が呼ばれ対応策を考えたりする。

充実感を感じつつ、片付けを手伝い調理場で皿洗いをしたあと、

ゆっくり食事をする。

料理番がマカナイテーシヨクというのをくれるのだが、凄く美味しいのだ。

夕食の仕込みを見物しながら一曲奏で、お茶の道具を運ぶベルさんに着いてき、おおむねの執務を終えた王子のところへ行く。

お茶を飲みながら、学者と大臣とどこかの部族長とかで、来季の政策の打ち合わせを行ったり、噂話をしたりする。

時々、私も意見を求められたりする。外国人なので、面白いらしい。

時々うちに来ないかと髭面で筋肉隆々の部族長達に誘われるが、今は王子の傍がいいと応えると何故か爆笑される。

解せぬ。

王子はまだ若いので、夕食まで勉強しなくてはいけない。

というか、引き籠もっていた間、部屋に教師が入れなかったのほぼ独学でやってたそうなので、今はがっつりやらなくてはいけなくて、大変らしい。

ついでに私も勉強しなくてはいけない。

大きな部屋に礼拝堂のような長椅子と、それに合わせた長い机が備えられ、小間使いや雑用係、庭師見習い従者見習いなどなど、つまりは成人前の子供達が午前と午後、もしくは夜、三部に別れ、歴史、国語、算数を学ぶ。

本来、私が居るべきではないのだが、王子が構わないと言っているので一緒に勉強させていただいている。

私は帝国語が書けないので大変ありがたい。

教師役には、義足や義手をつけた老人達が交代で、それぞれ年齢の違う子供達に勉強を教えている。

ただひとつ問題があつて

「楽土来たのね！あのね、この耳飾どう？あげるからつけて！あとねっお姉さまのドレス持ってきたの！お兄様は嫌っていうけど似合うつと思つたの」

乳母が微笑ましい顔でこちらを眺めているのが、辛い。

大臣の娘、ビアンカは何が気に入ったのか家で家庭教師もいると  
いうのにわざわざここで勉強することにしたらしい。

今日は汚れてもいいように、簡素なドレス姿だし、根は悪い子ではないのだろう。

「耳を引っ張らないで下さい。物は頂けません。あと、他の人の勉強の邪魔です」

勉強の邪魔と言われて、ピアノ力嬢は顔を赤くしたまま大人しくなった。

首に腕を回されたまま、字をなぞる練習を続ける。

「それより、あとで素敵な曲を弾きますから、唄ってもらえませんか？みなさん歌お上手ですし」

隣に腰掛け、足し算と睨めっこしていた馬丁見習いが犬歯の抜けた顔でやっと笑った。

「もてる男はツライよな」

「そのの式、間違えてますよ」

その頃、王子は王様や来賓と晚餐を行い、夜更けに部屋に戻る。

私は夕食を食べたり、食堂で明るい曲を奏でたり片付けをしたりしている。

疲れた様子の従者見習い達が食事に現れたら、王子が部屋に戻ったという事なので、私が代わりに行き今日あった事や人気のある囁を話しながら、夜に相応しい曲を奏でる。

王子は、他の人々にあった少し楽しい出来事の話が好きだ。

だから時々私は結末を変える。

意地悪な継母は改心する。恐ろしい王は、悔い改め王子と和解する。

悲しい娘は死なず若者に抱きしめられ、幼子は、土の中ではなく、母の胸で眠る。

呪われた王子は、幸せな結末を望むただの優しい青年だ。



## 7 前編

「ではお話をひとつ」

そうして私はリユートを掻き鳴らす。

あるところに若い腕のいい船乗りが居た。

だがあるとき船は難破し、船乗りは無入島に流れ着いた。

なにせ無人島、水はあり、少なからぬ獣や実のなる木はあったが人はいない。

孤独のまま、船乗りはそこで暮らしていた。

ある日の事、普段は難破した船が見えるのが辛くて近寄らない入り江に、若い娘達が海際で戯れているのを見つけた。

足元には彼女達の櫛や衣服が置かれている。

鮮やかな緑や青の髪をした美しい娘達を見た船乗りは、ふと足元の櫛を手を取った。

櫛を奪えば、娘は海に戻れなくなる。

それを知っていた船乗りは、手に持った櫛を  
うしますか？」  
あなたならど

「返すに決まっているだろう?」

「また独りぼっちになりますよ」

「自分の不幸に他人まで巻き込むことは無いだろう。ああ、でも、花のひとつぐらいいは手渡せるといいな。また会いたい」

「そうですか」

なんだか嬉しくなる。

王子は私の顔を見て、すぐ目を逸らした。

「え、すみません。なにか不快になるような事してしまいましたか?」

王子は部屋の隅に眼をやったまま、首を左右に振る。

「お前といると、道を踏み外しそうになる」

「私、平衡感覚良いから大丈夫ですよ?もし転びそうになったら全力で支えます!」

少し冷たい手を握り締め、真剣にそう告げても王子は目をあわせようとしない。

「絶対、いつか道を誤る」

震える声で囁く王子が心配になったので、思わず顔を覗き込む。

「方向感覚も良いですから、安心してください！私は泳ぎも得意です。人工呼吸もできますよ」

なぜか王子は、死にそうな顔をしていた。

\*\*\*

新たに貰った服は、暖かくて着心地がいい。

元は古着だが、丸々した手直しされた吟遊詩人の衣装はヒラヒラとしていて、隠しも多いので便利だ。

ついでにと貰った帽子との配色もよく、全体的に洒落ている。

ただ丈がやや余るので、少し足に纏れやすいのが難点か。

女性陣には非常に好評だった。

ベルさんに言わせると、現在鋭意流行させ中の形状らしい。このヒラヒラ。

王子は凄く微妙な表情をしていたが、アダンさんは爆笑していたので、ベルさんに小間使いのスカートを捲ろうとして平手食らった事をチクっておいた。

王子の執務中、隅っこで正座している姿を思い出すたびに笑いが止まらない。

ああ、面白かった。

現在私が居るのは、城の敷地内にある煉瓦造りの小さな建物の前。  
ノックして呼びかけるが返事が無い。

試しにドアノブを回してみると、あっさり扉は開いた。

もうもうと異様な臭気が漂うが、耐えられないほどではない。

床がべたべたする上、色々なものが転がっていて、足元が不安定だ。

様子を伺っていると奥の方で人の気配がしたので、少し考え中に入る事にした。

足元に注意しながら奥に進み、現れた頑丈そうな扉の横に紐が垂れているのに気がついた。

呼び鈴の代わりだと判断して、軽く引っ張る。

部屋の奥からドタバタと物音が響いてきたので、近くの簡素な椅子に腰掛け、この主が現れるのを待つ。

こういう小さくて密閉されたところは嫌いなので入りたくないのだけど、王子ことだから仕方ない。

待つ事暫し、厚い扉の向こうからぎゃあという悲鳴が聞こえ、続いて何か焦げた臭いが漂ってきたので逃げようかと思っていたら、勢いよく扉が開き、焦げ臭い臭いと共に一人の人間が現れた。

緑や黄色や赤の染みがついた薄汚れた白衣に、どどめ色でべったりとした長い髪、煤で汚れた顔に赤い瞳が爛々と輝いている。

不気味だ。

しかし、この外見では間違えようが無い。

教えられたとおりの外見である事を確認して私は軽く会釈した。

「ナニ、アンタ」

予想よりも高い声に少々驚きつつ、私は軽く自己紹介する。

目を細め、穴でも開きそうな勢いで私を見た後、薬師は懐から分厚い眼鏡を取り出し汚れた白衣の裾で拭いてから掛けた。

余計汚れそうな気もする。

「ああ、ナニ、王子ってば三重苦じゃないの」

「何が39?」

噂どおり、素っ頓狂な人物だと考えていると、分厚い眼鏡をかけた顔を近づけられた。

火でもつきそうだ。

「で、ナニ」

「薬師どのに伝言をお持ちしました」

そういつて、王子からの手紙をわたす。

内容は今まで食事を取らなかった王子へ処方されていた薬のお礼らしい。

物凄くまずいけど、少量摂取していれば食事をしなくても何とかなるらしい、一種の栄養剤だったのだろう。

薬師は手紙を読むと、意外と丁寧な手つきでそれを手元の鉛の箱にしまった。

目が合う。

「アンタにも用意してやってってくれて。喉の薬」

思わず言葉を失い、まじまじと目の前の人物を見つめた。

確か、元は帝国に仕えていたものの、色々問題があって国外逃亡し、名前を変えてここで仕える事になったという曰くつきの人物だ。

王子や大臣のお墨付きであるからには、腕は確かなのだろう。

と言う事は、また声が出るようになるのだろうか。

前のような声が出るようになったら、私はどうなるんだろう。

また恐ろしい目にあうのだろうか。

そんな思いが過ぎり、慌てて打ち消す。

歌えない吟遊詩人なんて意味がないのに、これじゃまるで、歌えない方がいいみたいだ。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「ナニ、たいした事じゃないわよ。じゃ、服脱いで。全部。下着も素敵な笑顔に思わず一步後退したが、足がもつれて盛大にこける。

薬師が笑顔のまま、横に吊るしてあった縄を手を取った。

「念の為にお伺いしますが、その縄は何にお使いの予定ですか？」

薬師の煤で汚れた顔の中で白い歯がキラリと輝く。

「新作の薬の実験台が逃げない用」

なんとか逃げ出した私が部屋に戻ろうと歩いていると、ベルさんに見つかった。

「あら、ひどいわね」

笑ってるけど凄く怒っている。

無理も無い。下ろしたての服がこんなに汚れては。

「いいわ、このまま洗濯場行って洗いましょ。着替え持ってっあげるから、先行って、走って！」

無論、全力疾走した。

洗濯場では、大きなタライが並び、賑やかな声とシャボンのニオイが充満していた。

普段は夜来ているので、こんなに人が居るとは思わずやや怖気づく。

一番奥の洗濯係が私に気がつき、あつという間に泡だらけの女達に囲まれた。

「あらー！王子の傍に居る子ね」

エプロンに一本青のラインをつけている洗濯係が確認と言うより、断定口調で私に話しかけた。

後ろで互いに話し合っている人達のエプロンは無地なので、彼女がリーダーなのだろう。

「はい。すみません、汚してしまったので洗わせて貰えないかと思いでまして」

裾のピンクやけばけばしい黄色になった部分を見せると、全員の顔が渋面になった。

「す、すみません・・・」



「これは手応えありそうね」

「姐さん、あの新しいの試します?」

「いや、36番でしょう。この黄色には」

「待って、ねえコレどこで汚したの?」

姐さんと呼ばれた洗濯係のリーダーがぐつと顔を寄せた。

緑の瞳を除けば、ベルさんに似ている気がする。ベルさんの方が年下だが。

「あの、薬師さんの所で転びました」

全員一斉に舌打ちした。

怖い。

「とりあえず、脱いで。こっちで洗うから」

「すみません。ベルさんが着替え持ってきてくださるそうなので、ちよつと待って下さい」

「いや、こつという汚れはすぐ落とさないと駄目だから」

「え!待って待って!」

襟掴まれ片手をとられ恐慌寸前になる私にリーダーが釦を外して

いく。

「男の子でしょ！しゃんとしなさいっ」

怒られるとは思っていなかったため、思わず呆然とする私に救いの手が現れた。

「可愛いからって、あんまりいじめないでよ姉さん。本当に小さい子好きよね」

「ベルさんっ」

「人をヘンタイみたいにいわないで！ちょっと年下の泣き顔とか困り顔みると嬉しくなるだけよ！」

立派な変態だった。

これ幸いとベルさんの方に逃げる。

「ごめんね、怖い思いさせて」

頭を撫でられるのは、構わないけれども、片手に持っているのはどう見ても……。

「あの、ベルさん着替えは？」

「ああ、はい。あっちで着替えて良いわよっ。」

笑顔で差し出されたのは、どう見ても。

「えっ？」

「え？」

「あの、着替え……」

「どうぞ」

差し出されたのは、どうみても……。

「あ、いや、あの」

「汚さないでね」

笑顔だ。

「女の子の服が嫌なら、とりあえずコレ着て自分の部屋行って着替えれば良いでしょう。汚れはさっさとしないと落ちにくくなるんだから！早く脱いで」

横でリーダーことベルさんの姉さんが、断固とした口調で言い放つので、大人しく受け取り、近くの物陰で着替えて脱いだ分を渡す。

「なんか、ムカつくわね」

そういつつ、何故頬を赤らめ、うつとりした眼差しでこちらを見るのでしょうか。

より具体的に言うと、肉屋の店先でぶら下がってる肉を見つめる犬の眼だ。

「あ、違う違う。そんな目で見ないで。ちょうど同じ位の背の女の子用んだけど、手直しが必要だからちよっと着てみて欲しかったの。私の趣味じゃないよの？」

恐ろしい姉妹に、もはや曖昧な笑みしか返せなかった。

泣きたい。

「髪の毛よねー短すぎるし、帽子じゃ変だし。あ、スカーフ巻きましようか」

「髪の毛伸ばしてね？今度リボンあげるから」

じりじりと狭まる包囲網に、もはや何も出来る事はなかった。

## 7 後編

人目を気にしつつ部屋に戻ろうと歩いていると、王子と小姓達がぞろぞろと移動しているのを見た。

王子は下半身が蛇になってしまったので、本人は動けないと思いつ込んでいる。

そのため、車椅子を使っているのだが、車輪に絨毯が絡んで色々苦労が絶えない。

慣れれば歩くのと同じように動けるはずなので、早く説得して練習してもらおう事にしよう。

とはいえ、この格好を見られるのは嫌だったので、とりあえず近くの窓から裏庭へ飛び降りた。

幸い裏庭には人気が無いが、なんとなく足の向くほうに進む。

裏手はうっそうと繁る森、さらに山へと続いているので、山の獣なども行き来しているらしく、姿は見えないが他の生き物の気配がした。

害をなすものではないようなので、放っておく。

無意識に、ちろちろと流れる小川を見つめていた。

別に、女らしくありたいとか男になりたいと言つ願望があるわけではない。

背が低いのは時間が解決する事だし、声がこれで、顔立ちも判別がつきにくいらしいので仕方ない。

ただ、善意で髪を短くされ、男物の服を用意されれば否定しにくいし、王子が婚約者に手酷い扱いを受けたと聞けば更に言い難い。

「ドツボだ」

溜息をついて大きめの石に腰掛け、靴を脱いで小川に足を浸す。

元は人工の川だが、長い年月を経てこの地に馴染んだのだと水は言う。

生えていた葦を一本切り取り笛を作り、少し鳴らしていると人の気配が近づいてきた。

こちらには気がついていないようだったので、そのまま吹き続ける。

氷柱みたいな悲しみが柔らかいところに突き刺さったままなので、少しだけ雨を降らす。

少しだけ、氷柱が溶けるように。

しばらく吹いていたが、霧が出てきたので部屋に戻ろうと立ち上がり、振り返って思わずのけぞりそうになった。

ひ、人が増えてる！

演奏に夢中になると、つい我を忘れるのは私の悪い癖だ。

鳥達が羽ばたき一斉に飛び交う中、遠目ではあるが知った顔を見つけた。

あの宰相、それに時々王子の部屋のあたりですれ違つ、眼帯をつけ髪に白いものが混ざっている初老の男性。

後ろに居るのは護衛とかか。

他の人なら良いが、宰相は怖い。

アレ以来、遭遇するたびにスゴイ目で見られているし、その上、この格好を見られたらどうなる事か！

とっさに葦の茂みに入って身を伏せ、そのまま音を立てないよう  
に注意を払いながら移動す

ガコッ

「とつたどー！ って、言うらしいわね、こついう場合。ナニ、バ  
カなの？」

上から、籠を被せられた。

おそらく背負い籠だろう。

動こうとしたら、頭をぶつけた。

痛い。

ミシミシと軋む音がして、籠の上に何かのつた事が判る。

しばらくして、複数の足音が近づいてきた。

「あら、薬師。何故こんなところに？」

「材料採りに。そこ、苔踏まないでよ。アンタの皺取り薬の材料よ」

慌てて後ずさる気配。

「アンタ達こそナニよ。こんな見捨てられた所来るのは、アタシか叱られた子供か、アホな魚ぐらいよ」

「相変わらず、威勢が良いな」

渋い声だ。ん、どこかで聞いた覚えがあるような？

「あーら、王様、こんな所でサボっていいの？」

籠の上でミシミシという音が激しく鳴る。

もしや、上に座っているのか。

薄暗いし、籠は変な臭いをさせているし狭いしで、耳を済ませる



しか出来ない。

「優秀な人材が揃っているのですね。所で、こちらへ誰か来なかったか？」

冷や汗がたらたらと垂れてきた。

「誰か、ねえ　ちよっとそこ踏まないで、そっちも！コレ買っと高いつて言ったでしょーが！邪魔よアンタら！忙しいのよアタシ！どっかいつて頂戴ッ知りたきゃ一人で来なさいよ！」

シツシツと無下に王様達を追い払う薬師。

しかし、薬師は凄いい口の利き方だが、誰も頓着する様子が無い。いいのか。

「陛下、やはり兵士を呼んで全面的に山狩りを行いましょう。危険です」

「君は心配性だね。たかが娘一人に」

「たかがではありません！ええ、アレは人ではないのかも、こんな忽然と消えるはずがありません」

話が、大きくなってる。

冷静そうに見えた宰相だが、今や感情剥き出しだ・・・ピアンカ嬢の母親だと考えれば、十分頷けるか。

「いや、フツーに見失っただけでしょ。そこら辺の窓から出入りで

きるんだから。それより、仕事したら？」

薬師のあきれたような声に、宰相のヒステリックな声は、ピタリとやんだ。

目の前で怪人物が上機嫌で踊る足取りのまま、得体の知れない硝子瓶や細長い棒を柵から取り出しては、うふふと低く笑っている。

誰か助けに来てくれないだろうかと考えたが、助けられそうな人物の心当たりもないし、そもそもこの分厚い壁の外に声が届くとも思えず、更にこの格好を見られるのも嫌なので私は黙って椅子に座っていた。

そもそも縛られているので、座る以外出来ないが。

目が合う。

「ナニその顔。恩人に対して」

「縛られてる状態で恩人もクソもないかと」

「ナニよ。ロマンの判らんガキね」

そう言って薬師は私の頬を両方向に思う存分引っ張るといふ行為を数回繰り返し、大変満足した表情になった。

頬が痛い。

「今回はコレぐらいにしとくわ」

そう言って縄を解く。

そもそも何の為に縛ったのか。まったくもって意味不明である。  
何なのか、この人は。

「恐れ戦く姿が見たかったからに決まってるでしょう!」

ただの、ヘンタイだった。

「ちょっとは泣きわめきなさい。ナニよガキの癖に。澄ましたツラ  
しやがってムカつくわ」

理不尽過ぎる。

言っても無駄だと思い、縛られていた部分を擦り、また服を汚し  
てしまったことに気がつく。

「石鹸」

「え?」

「ありますよね。質のいいのを作れるでしょう、薬師なんですから。  
この服を洗うのに必要ですから下さい」

溜息をつきながらそう言って立ち上がると、薬師は手に持った硝  
子瓶をしばらく睨み、元の位置に戻した。

「実はアタシ、アンタだけに言うと、薬師じゃなくてアルケミスト

なのよ！」

無意味に胸を張り、腰に手をやり、今にも高笑いでもしそうなポーズをとる薬師。

「つまり、薬師ではなく、詐欺師だから石鹼は作れないと？」

念の為問い返すと、薬師は地団太を踏み金切り声を上げた。

「ちーがーうツ！この溢れんばかりの才能を！石鹼作りなんかで浪費させるなって言ってるのよ！」

「帰ります」

「待つてー行かないで話し聞いてーついでに血と髪の毛ちょっと頂戴ッそして実験させて！」

「嫌です」

縫りつく薬師を振りほどこうとするも、耳掴んだり髪の毛引つ張ったりしてきて大変鬱陶しい。

「ホラ、ナニ、声治す薬作るから、アンタの協力が必要なの。ねえねえ」

だからと言って耳を引つ張るな。

「もう要りませんよ！大体、それが頼む態度ですか！人を縛ったり実験台にしようとしたりして！どうして普通に出来ないんですか！」

真面目に怒ると薬師がピタリと手を止め、まじまじと私を見つめた。

「トンガリ耳のちみっこに凄まれても、なんか、こっぴどいっていい……あ、ヤダ。成る程そっぴどい事」

なにやら一人で納得した様子なので余計腹が立ったが、ぐっ、と押さえる。

あと何年かすれば背も伸びるので、この扱いはそれまでの我慢だ。

そう考えて堪えている私の内心も知らず、薬師は心底嬉しそうに笑顔でこっぴどいって言った。

「ほら、ニヤァって言うてっぴどい」

\*\*\*

「どうしたんだ？今日は姿を見なかったが、喧嘩でもしていたのか？」

今日は普段の予定を大幅に変更せざるをえなくなり、調子がすっかり狂ってしまったので調理場でお菓子を貰い王子の部屋に行った。

王子は痩せ過ぎなので、何か食べさせるためと言えば色々用意してもらえるのでありがたい。

「ちよっぴどい」

果物や野菜を練り込んだマフィンには相変わらず美味しい。

小さいので幾つも食べられるのが尚宜しい。

王子も二つ目を食べているのを見て、ちょっと安心しつつ冷めた紅茶を飲む。

「ああ、そつだ。言っていないかったが、お前は裏庭には近づかない方がいいぞ。薬草を育てているし、山の獣も出入りするからな。今日も何か出たそつだ」

「ごほごほと噎せる私をよそに、昔話に花が咲く。

「そついえば、王子あそこで変なロバに追いかけられた事ありましたね」

アダンさんがそつ言つと、王子は少し遠い目になる。

「アレは、山羊だろ？」

ベルさんが手巾で私がこぼしたお茶を拭き取り、とっくに着替えた服を未練がましく見つめ、小さく呟く。

「あつちの方が可愛かったのに」

よく汚れの落ちる石鹸であろうと、手で綺麗に洗うのはかなり大変だった。

今回は洗濯板を使う事を硬く決意したのは、言うまでもない。

「ベルさん、あまりからかわないで下さい。薬師に29と言われま  
すよ」

よくわからないが、薬師に言わずと私を執拗に構って来る人には  
こういえばいいらしい。

かなり侮辱的な意味合いらしいが、この国特有の隠語なのだろう  
か？

ベルさんはしばらくきょとんとしてから、動物トークをしている  
王子とアダンさんを見やり、首を傾げた。

なんとなく、自信のなさそうな表情を浮かべ、小声で言う。

「もしかして、王子は39って言ってた？」

頷くとベルさんは噴出し、アダンさんをひっぱり部屋から出て行  
ってしまった。

しばらくして、廊下から笑い声が小さく聞こえる。

「なんなんだ、あいつらは」

首を傾げる王子に私もなんででしょうね、と合わせておいた。

珍しく二人きりだなと思うと、顔が緩みそうになったが、ぐっ、  
と堪えておく。

王子はしばらく首を傾げていたが、私に目を戻し少し笑った。

「何か曲か話を頼めるか？」

あまり、王子は笑うべきじゃないと思いつながら手に持ったカップをテーブルに戻す。

「ではお話をひとつ」

そうして私はリュートを掻き鳴らす。



「これは言い伝えによると満月草とも呼ばれるものです。毒はありません。元は胃薬とかの材料にもなるのと同じ草ですから」

どろりとした薬湯を気持ち悪そうな顔で見つめる王子と宰相に淡々と説明する。

「ただ、種を植えたのは新月で、月の光に当てて育て、昼は日光を遮断、与えるのは朝露だけというものなのです」

様々な方面から集めた呪いの解き方を文章にまとめ、王子が今までに試した解呪と突合せると、ひとつの事がわかった。

呪いを解く方法として伝わっているものは、ガセが多い。

もしかして、ショック療法としてわざわざドギツイ処方を作ったのではないかと勘繰りたくなるようなひどいものを選び分け、薬師に確認し、それでも

「この通り、私が飲んでも害はありません」

そう言って巨大なマグから一口飲む。  
苦い。

宰相は私の様子をしばらく見つめ、自分も一口飲んでから、冷静に判断を下した。

「恐らく、大丈夫でしょう。確認は取れていますし。どちらにせよ、

今のままよりは良いですから。どうなさいますか？殿下」

そう言って、憎憎しげに王子の下半身……つまり、呪われている姿である蛇尻尾を見つめる。

もしこの薬湯が何らかの解呪法でなければ、つまりガセネタなら王子の姿は変化しないし、

何かの解呪法であれば、王子の姿は変化する。

運がよければ、元の人間の姿に。

「試すに決まっている」

王子は覚悟を決め、マグを手に取り一気に飲み干した。

「せめて、この姿だけはどうにかしたいものですね。あなたも、殿下と陛下の御厚意でここに居るのですから、それなりに考えておきなさい」

私は殊勝に返事をし、寝台に横たわる王子に目をやった。

特に、寝台からはみ出す蛇尻尾に。

「すみません。王子。またハズレでした」

「お前が努力してくれた事はわかっている」

口直しにと葡萄酒をお湯で割って差し出す。

一口ならまだしも、小さな酒瓶なら丸々入るようなマグの中身を飲み干したせいで、気分が悪いらしい。

私のせいだ。

心臓の辺りがチリチリと痛むのは罪悪感だろうか。

「これで、薬関係はほぼ潰したと思います。黄金の林檎はさすがに難しいですし、後は海婆かケンタウロスにでも聞かないと」

王子に呪いをかけたのは魔女なので本人か他の魔女に聞くのが手っ取り早いですが、あいにくどちらもツテがない。

しかし、城の周囲は山に囲まれているので、知っていそうな心当たりが無くもないし。

「お前なら、ラゴンの生き血やユニコーンの角でも試しそうだな」

「生き血は呪いの一種ですから、あまりお勧めできませんね。ユニコーンは見た事が無いのでなんとも言えませんが」

真面目に返すと、王子は微かに笑った。

「あの本棚にあるそうだが、その赤い表紙を取ってきてくれ」

言われたとおり、分厚い本を本棚から抜き出し差し出すと、王子は慣れた様子でページを捲った。

不思議な顔をした生き物や、豹のような模様の馬が描かれている。

「コレがユニコーンだと言われている。大人になると角が二本になるが、子供のうちは一角なのだから」

王子の示した頁には、牛に全身鎧を被せたような奇妙な生き物の  
絵。

ユニコーンって、馬に角が生えた姿だと思っていたけど。

「遙か地の果てに住んでいるそうだから、諦めた方がいいぞ。行くまでに寿命が尽きる。きつと誰かの話が誇張され伝わったのだろうな」

絵と王子の顔を交互に見ていると、王子の笑みが深くなった。

「王子って、笑うと子供っぽいですね」

悔し紛れにそう言つと王子は渋い表情になり、低く笑う声はその表情に拍車をかけた。

「アダン、ノックぐらいしろ」

「こりゃ失礼。でも構わんでしょう、疚しい事してるわけじゃないんだから」

睨む王子にアダンさんは軽く肩を竦めた。

「引き籠もりも直った事だし、寝台の場所直しましょうか、王子が思う存分、疚しい事出来るように」

「アダン！」

アダンさんが長身だという事もあるが、王子、ちょっと子供っぽい。

「ほら、ちょっと来てみな」

膨れる王子をよそに、アダンさんに襟首を掴まれ、向かった先は王子の部屋の東側、よく見れば鍵つきの扉がある。

仰々しい鍵を開くと立派な寝室があった。

大きな寝台にサイドテーブル、複雑な装飾のある照明器具。

少し黴臭い気がするの、閉め切りだったからか。

「ここは、鍵閉めたら本気で誰も入れないから、あつちに無理やり移動させてたんだ。でも、今はもう大丈夫だからな」

ちよつとだけ優しい声になり、私の背中を強く叩いた。

「どーする？こつちの方が大きいから、お前王子と疚しい事し放題だぞ。部屋引き払ってここで寝るか？」

「アダン！」

のたのたと王子が寝台から降りて壁に手を付きながらこちらにやってくるのを嬉しそうにみるアダンさん。

「どうしましたか、王子。こいつと一晩中疚しい事できますよ。こつちの部屋なら」

凄く嬉しそうに連呼しているのを私は白い目で眺め、溜息を吐く。

「何を言っているんです？アダンさんじゃあるまいし、王子も私も一晩中カードゲームしたりしません。ですよね？王子」

アダンさんは棒でも呑んだ顔をした。

べちつという物の落ちた音がしたので、振り返ると王子が床に突っ伏している。

おそらく、体のバランスが取れずこけてしまったのだろう。

「王子、腰とか下半身を鍛えた方がいいと思いますよ。良かったら、私がいくらでもお付き合います」

どうやら、相当痛かったようだ。

王子は床につぶしたまま、しばらく動かなかった。

\*\*\*

「ドラゴンの生き血にユニコーンの角オ？ナニ言ってるの？」

もぐもぐと糖蜜クッキーを食べながら、ホルンは馬鹿にした口調のまま古びた羊皮紙を広げた。

「薬師ならそれくらい知ってるでしょう？ドラゴンくらい一匹か二匹、心当たりないんですか」

自称錬金術師で薬師の・・・本名はホムなんとかと書いていたが、発音しにくいのでホルンと呼ぶ、がクッキーに噎せたので水を手渡してやる。

「ドラゴン殺しっていったら初代ベガルデーモじゃない。全滅させたって話よ。だからもうこの世界にドラゴンはいない。ユニコーンは、どうなんでしょうね」

副料理長のお菓子はいつだって最高だ。

感謝して味わいつつ、ホルンの手袋に包まれた指が示した部分を

のぞいた。

広げられた羊皮紙にこぼさないように注意しながら見れば、まるで絵のような文字がみっちり書き込まれている。

隅に書き込まれているのは、大きなトカゲを串刺しにしている男の絵。

「このトカゲは何？」

「ドラゴンだってば」

「コレ、誰が描いたの？」

「アタシ」

「デッカイトカゲを？」

右頬を引っ張られたので、左頬をお返しに引っ張ってやる。

「ナニよ、痛いじゃない、放しなさいよ」

「そっちが放すべきだと思う」

しばらく睨み合ったが、埒が明かないので同時に手を離す。

「アンタ、いい根性してるわよね」

「ありがとう」

にこやかに笑い合いつつ、互いの両手をがっちり押さえ合う。筋力あるな、ホルン。

「でも、コレぐらいの大きさの生き物なら、一匹ぐらい残ってそうなのに」

そういえば、教会の壁にもこの絵と微妙に似ていなくも無い生き物が掘り込まれていたけど、あの時は確か。

「ていうか、ドラゴンて、どついう生き物ですか？」

ホルン、噎せ過ぎ。

「ナニよ、アンタ、吟遊詩人でしょ？一応」

「ドラゴンに関しては、教会の管轄なので芸人風情が面白おかしく語ってはいけないの一点張りであまり知識が」

他の戯曲もたくさんあったので、わざわざ目をつけられるような事をする必要も無いし。

「だって、異民族で異教徒の芸人が教会に近づくと水掛けられるんですよ」

おまけに奴隷だ。

帝国内は外国人も大勢いるのであまり規制は厳しくはないが、隣のジューガは戒律が厳しい。

大雨の日に雨宿りしようとしたら速攻蹴り出されるくらい排他的なので、あまり好い印象はない。

ホルンは顎に手をあて、しばらく考えてから言った。



「空飛んで火を吐いて、あとなんだったかしら。大きさ的には家くらいとか？村ごと食い荒らしたとか」

指折り数える特徴に戦慄を覚える。  
まるで神話の生き物だ。

「龍より凶悪なんですね」

ドラゴンも無しだ。

最後の糖蜜クッキーを半分こにし、片方を頬張った。ああ、美味しい。

ホルンは、変な顔をして半分に割れたクッキーと私を交互に見る。クッキーを渡すと、眉を寄せ口を歪め何か言いかけてやめた。

彼女が変なのは、いつもの事だ。

しかし、ドラゴンもユニコーンも駄目なら、後は何かあるだろうか。

幸い、このお城は山に囲まれているので少し出歩いてみてもいいかもしれない。

ガタゴトと傾斜を荷馬車が下っていく。

天気は清々しい晴れ、遠くで鳥達が秋の喜びを唄い、荷馬も御者も機嫌がいい。

私は指をリユートから離した。

どこも収穫祭に向けて人が慌しい。

とはいえ、今日は休日。

大半の人間は休みなので、私もこうして荷馬車の荷台に便乗し城下町へ遊びに行こうとしている。

「ナニか、アップテンポなのやってよ」

隣でさも当然と言う表情でリクエストしてくるのは、薬師にして自称アルケミストのホルン。

今日も顔を汚し、頭からフードを被り怪しさ満点だ。

荷馬車の主で、食料などを運送している髭顔のリコさんはこの扮装に慣れているようだからいいけど。

「外出時くらいは、顔洗いましよ。若い女の人なのに・・・」

リユートに手をかけながらそう言うと、ホルンは目深に被ったフードを更に前へ引いた。

「日に当たると火傷すんのよ」

「あ、そうなんだ。大変だね」

荷馬は毛艶も肉付きも良く大事にされているようなので、テンポのいい黒馬の曲を奏でる。

少しペースが速くなった。

下り坂なのでコレは危険だと気がつき、ゆったりした白馬の曲に切り替えるとペースもゆっくりに戻る。

ノリやすい馬だ。

御者席からリコさんがこちらを振り返り、にやりと笑う。

「可愛いヤツだろ」

この馬をとても可愛がっているのは、よくわかった。

城下町は大広場を半円状に囲んで商店があった。

「じゃ、また明日だ。門番がうるさいから、夕刻の鐘が鳴ったら戻るんだぞ」

リコさんがわしゃわしゃと帽子ごと頭を撫でるのを我慢し、馬が鼻水を垂らしながら別れを惜しむのも耐える。

悪気が無いのはわかってる。

「いつもありがとう。荷物は後で預けさせてもらいに行くから」

殊勝な態度のホルンは貴重なのでニヤニヤと見ていたら後ろ蹴りされたので蹴り返しておいた。

今日は礼拝日でもあるので、日の上りきらないこの時間はまだ人

出が少ない。

教会から微かな『おるがん』の音が聞こえるのを羨ましく思いながら、閑散とした商店を歩く。

靴屋も仕立て屋も鍛冶屋も休みだが、…パン屋は作り置きのみだけ販売か。

商店はどれも掃除が行き届いていて、通りにもほとんどゴミが無い。

襪を纏って眠っている子供もいないし、時折首輪をつけた犬や太った猫が警戒しつつこちらをみるぐらいだ。

国が小さいからか、一応城下町だからか、色々行き届いているなと感心して触れた街路樹は、舗装で根が締められていない分、生き生きと枝を伸ばしている。

こないいいところなのに、ホルンは行き付けの薬種問屋に行ってしまったので、一人で歩くのは少し寂しい気がする。

いい匂いに誘われ、辿り着いた先は少し奥まった所にある軽食屋だった。

店主らしき女性と給仕の少年が一人忙しく働いている。

どうやらお酒も出しているらしく、まだ早い時間なのに赤い顔をしている人が数人いるが、

子供を連れた老夫婦がのんびりと食事をとっていたりしているし、のんびりとした雰囲気は悪くない。

色々天引きされるとはいえ、少しばかり手当てを貰っているの  
で懐に余裕はあるし。

カウンター席に腰掛けても、なんとも言われない。

うん、久しぶりだ。やはり服がちゃんとしてると、周りの対応も違ふよね。

メニューを見て、ちゃんと読めることを喜びつつ、モーニングセ  
ットを頼む。

干し葡萄の入った黒パンにたっぷりジャム、狐色のソーセイジに湯気を立てるホットミルク。

確か、飲み物はお茶だったと思うけど。

「アンタ、初めてのお客さんだからサービスよ。年頃の男の子ってのは、とにかく腹が減るもんだからね」

カウンターの内側から、初老の女性がウィンクした。

異論はあるが、お腹が空いていたのは事実なので、お礼を言っておく。

このパン美味しい。

基本的に城で出すのは上等のフカフカな白パン。

庶民の口にするのは黒くて酸味の強いパンなのだが、これは干し葡萄を入れる事によってただ酸っぱいだけじゃなくなっているようだ。

うん、でも美味しいなコレ。

「ごちそうさまでした。凄く美味しかったです」

「アンタ、子供の癖に口上手ね。女を食い物にする悪い奴になっちゃだめだよ」

なんか、諭された。

色々反論はあったが、手っ取り早く、外套の下からリュートを取り出し軽く見せる。

「私はコレで食べてますから。美味しい食事のお礼よろしければ一曲弾きましようか？」

モーニングの代金をカウンターに載せ訊ねると、店主はやや考え、

にっこりした。

「じゃあ、アタシにピッタリのヤツ頼もうか」

私は笑み返し、捧げられた食事とお酒が美味しくて喜びのあまり一晩中踊り続けたという豊穣の神の曲を奏でた。

震える空気が収まってから、深々と頭を下げるとまばらながら拍手をもらえた。

ほっとして顔を上げると店主が満面の笑顔を浮かべ、カウンターの下から小麦菓子を取り出し皿に盛り付ける。

周囲を見渡せば、数少ない客が笑みを浮かべていたので、私も嬉しくなった。

「てつきり食事代負けてくれっていう事かと思ったけど、とんでもないね」

そういつて山盛りのお皿を私に差し出す。

「良かったらここで働かないかい？夜になればもっと客が来るしね。食事は出すし、チップも稼げるよ。収穫祭までは人が増える一方だしね」

熱心な口説きにうっかり頷きそうになるが、慌てて首を振る。

「私、今よそで仕えていますから」

「そうかい。残念だけど、まあアンタならお城にいるっていうお稚児さんなんかよりずっといい腕してるだろうしね」

お稚児さん？

「そんな人居るんですか」

うん、この御菓子も美味しい。この人が作っているのだろうか？

「うん、この国の王子様、今呪われてて、並の女じゃ恐ろしがって近寄らないからってんで綺麗な男の子を・・・アンタにする話じゃなかったね」

いささか気まずそうに言葉を切る店主をしばらく凝視し、手元のお菓子を落とす。

「王子に少年愛の趣味はないとおもいますよ？」

ないよね？居ないよね、それっぽい人。

「無いといいけどね、お世継ぎできないと困るから、でも呪われてたら嫁も来てくれないだろうしね。どうしたもんか」

溜息交じりで店主が目をやった先には、額縁が飾られていた。

「そちらは？」

「この国の王様と小さい頃の王子様、亡くなられた女王様。十年ぐらい前の絵だね。いい時代だったよ」

中には銀髪に王冠が良く映える美しい女性と、眼帯をつけた軍服姿の男性。

その間に王子らしい幼児が描かれていた。

…ちっちゃくて、ぷにぷに。

この絵は何だか、どことなく微笑ましく、暖かな気持ちになると私は感じ、画家はきつとこの家族が好きだったのだらうとぼんやりと思った。

しかし、この幼児の姿からは、同じ位の子供がいてもおかしくないように思える今の王子の姿からは想像もつかない。

「呪いを気にしないお嫁さんが来てくれれば一番ですね。絶対どこかに居るはずですよ。王子は人格と顔はいいですから」

嘆息しつつ、そういうと店主は曖昧な表情を浮かべながら頷いてくれた。

王子は頭も悪くないし、いい意見があれば採用する懐の深さもあ  
るし。

人の出入りが多くなれば情報も増えるので、何か呪いを解くきつ  
かけも出来るかもしれないし。

お皿も空になったので、礼を言って店を出た。

礼拝が終わったのか、晴着姿の家族連れなどが通りを歩いている  
のを見かける。

この国は部族ごとに祖霊を崇拝しているが、移民や部族を離れた  
人間は教会に帰依しているので、最近では宗教に関する揉め事が増え  
たと事務方が口にしていただけを思い出した。

人の疎らな広場の隅にある大きな栗の木の下で気紛れに曲を奏で  
ながら、様々な話を聞いた。

やはり、城にいるだけじゃ情報が限られているので、ここへきて



よかったと素直に思う。

様々な人間が流動するので、町雀達は、毎日面白いらしい。  
獵師が休憩していたら、座っていた大きな岩が身動きした話。  
収穫祭が近く、みな料理コンテストの為に腕を振るっているので  
役得にありつける話。

指が寒さで痛くなってきたので曲を止め、息を吐くと一斉に拍手  
が響いて驚く。

いつの間にか人が増える。

この目の前に置かれた大きな葉っぱの上に、銅貨や白銅貨が置か  
れているし…営業のつもりは無かったんだけど。

晴着の人も居れば、非番の兵士の姿もあつたので、軽く会釈する。  
しょうがないのでリクエストに応じて、軽快なダンスの曲を弾い  
ていると段々お腹が空いてきた。

気がつけば日は真中に昇り、広場にいくつか出ている屋台からは  
香しいカオリ。

寒いのか私の隣に体をくっつけるように座っていた女の子達はあ  
まりお腹が空いていたみたいだが、踊っていた夫婦が恋人達の何  
組かは輪から抜けて屋台の方へ談笑しながら行くのが見える。

「…もう終わりです」

お腹減ったし。リュートから手を離し、手早く仕舞い、立ち上が  
ろうとしたら何故か両隣からしつかりと腕を掴まれた。

目の前で地面に座り込んでいた老人が何故か爆笑する。

笑い声を聞いて、兵士が隣で踊っていた女性から手を離し、振り  
返って何故か笑う。

「おい、ロメオ。指折られないように注意しろよ」

思わず眉間に皺を寄せながら左右の女の子達の顔を見る。  
城の小間使い達と同じ位の年齢だろう。休みの日なので、それぞれ着飾った風が彩り鮮やかで可愛い。

「指折るの？」

そういえば、治安の悪いところだと首絞め強盗とか出ていた事を思い出す。

ここもそんなに治安が悪いのだろうかと悩んでいると、女の子達は赤い顔を激しく横に振り一斉に手に持っていた鞆や櫛を兵士に投げつけた。

「アホ不細工ッ」

「変なこと言わないでよバカッ！」

「せっかくのイケメンに何言ってるのよ！このノーキンッ」

その他にも近くの女の子達が一斉に靴やらなんやらを投げつけ始めたので、私はこっそりと逃げ出す事にした。

よくわからないけど、女の子、怖い。

\*\*\*

両手に一杯食べ物を抱え、安心して食べられそうな所を探していたら人気の無い公園に出してしまった。

手入れは良くされていて、半分ほど傾斜になっているが各所に紅葉した木や、美味しそうな林檎のなった木、水の枯れた噴水と天使の像などがあって心の安らぐ場所になっている。

尻尾を振って寄って来た連中にも少し分けながら、秋の澄んだ空  
気と緑の匂いを吸い込む。

何処かで、落ち葉を焚くにおいがした。

町中と違い、ここは鳥も多いし木も多いので中々雰囲気がいい。

買ったうちの半分は私の口には入らなかったが、まあいい。

食事は大勢の方がいい。

ついでに色々聞いていると、森の中で急に動く岩の話は色々バリ  
エーションがあることがわかった。

早いうちに確認する必要があるようだ。

最後の一口は小さく砕いて鳥に与え、また他の面白い話があった  
ら教えてくれるように頼む。

気はいいが、小さい分、忘れっぽいのが難点だけど…。

しばらく空を眺めながらぼーっとしていると、草を踏む音。

少し考えてから体を起こすと、恰幅のいい老人が一人、花束を持  
って歩いているのが見えた。

向こうも私に気がついたらしく、軽く会釈されたので、慌てて立  
ち上がって頭を下げる。

「こんにちは」

皺しわの顔に眉毛も真っ白でもじゃもじゃしているが、肌は黒い。  
寒いので帽子を被っているが、恐らく髪もチリチリしているのだ  
ろうなと思った。

大叔父と同じように、南方出身なのだろうか。

なんだか親しみが湧いて、立ち上がり草を払う。

「いいお天気ですね。お散歩ですか？」

老人は目を眇め、皺だらけの顔に笑みを浮かべた。

「いや、友人に会いに来ただけだよ」

そう言つて、軽く花束を掲げる。

優しさの中に一抹の寂しさが混ざつた表情に思わず口ごもり、周囲を見回す。

「ここ、お墓だつたんですか」

よく見れば、私が出たところから少しの距離に地面に埋め込まれた石碑が点々とある。

老人は、うろたえる私の様子が可笑しかったのか、今度はまじりつけの無い笑みを浮かべた。

「君はさつき広場で演奏していたね。若いのにいい腕をしている」

\*\*\*

「それでアダンさんが言うんです。『尻尾つけるか？』って、私はドーブツじゃあ無いのに！ワンとか言えばいいんですか！あんまり腹が立つから、尻尾作つてアダンさんのズボンにくつつけてやりました」

お爺さんが楽しそうに聞いてくれるので、こちらとしても熱が入る。

「羊毛の固まり貰って徹底的に梳いてフワフワにしたからもう、大変ですよ。アダンさん、城中の猫に追いかけられて。王子は笑いきて宰相に怒られるし、私もベルさんに怒られるし」

「王子が？」

凄くびっくりした表情を浮かべられ、しまったと思うが後の祭りだ。かなり色々話したし。

「お爺さん、内緒にして下さいね。私がお城で働いてるのバレたらお城クビになった後ここで働けなくなっちゃう」

不思議そうに軽く首をひねるので、丁寧に説明する事にする。

「だって、王子とかお城で勤めてる人達、凄くいい人ばかりなのに、そんな所クビになったって聞いたら私相当なワルだと思われるじゃありませんか」

もちろん、クビになるような悪い事をしようとは思っていないが、私は所詮歌も歌えない吟遊詩人の出来損ない。

元々元気の無かった王子の為に大臣が気を回したわけだし、今やちゃんと執務に励んでいる王子が『飽きた』ら、私はお役御免だ。

ちゃんと色々できる吟遊詩人や腕のいい楽士を雇った方がいい。晴れて奴隷ではなくなったのだし、しばらくこの近辺でお金を稼いで旅装を調べてからゆっくり故郷にかえるつもり、という話をお爺さんは黙って聞いた。

「なにか困ったことになったら、うちに来なさい。旅籠の隣の赤い屋根の家に住んでいるから」

真面目な口調で言われたので素直に頷く。

一緒にお墓に花を供える頃には、あたりはすっかり日が暮れ涼しいと表現するには寒すぎる風が吹き始めていた。

もうすぐ夕刻の鐘が鳴る。

次の黄昏の鐘が鳴ったら城門が閉められてしまうから、そろそろ帰らなくてはいけない。

そう告げると、お爺さんは頷いて懐から細長い包みを取り出した。

「これは私の友人が選別にくれたものだけど、君にあげよう。彼も王子の事を心配していたから」

包みの中には、鈍く光る銀色の笛。

受け取って軽く吹いてみると、空気に染み渡る素晴らしい音色がした。

これは、誰かの大切な想いが籠っている。

「駄目です。これは私は受け取れません」

耳の中にまだ音色が残る。

名残惜しさを堪えて笛を返そうとしたが、受け取ってもらえない。

「君なら、正しい使い方が判るはずだ。そうやって人の手を渡ってきたものだからね」

待ち合わせの場所に行くと、ホルンが苛々とした様子で待っていたのでひとしきり謝罪する。

長い坂道を足早に登る最中に、夕刻の鐘がなったので少し安堵しながら城門へ入ると、門番達がニヤニヤと笑っていた。

なんなんだ。一体。

不審に感じつつ部屋に戻ると、王子から呼び出され、慌てて出向く。

王子は模様替えしてすっかり王子の部屋らしくなった室内で、黒塗りの立派な机で書き物をしていた。

「お呼びにより参上いたしました」

少し格好つけて挨拶すると、返ってきたのは恨みがましい眼差し。

「今日は、どこへ行っていたんだ」

「薬師のホルンと城下町へ。色々食べたり遊んだりしていました。

あ、お土産あります」

腰にぶら下げていた袋ごと、菓子屋で購入したザラメの掛かったクッキーを渡す。

「売り子のお婆さんが、小さい頃王子達がよく買いに来ていたといっていましたので」

王子は袋からクッキーを取り出し、しばらく見つめた。

「あら美味しそう。私も貰っていい?」

ベルさんがニコニコしながら王子の手から素早く袋奪って一個齧った。

隣のアダンさんと従者見習いのエリアスにも一つづつ。

…まあ、みんなで食べるつもりだったからいいけど。

「どこで買ったやつだ？」

「教会の隣の角の小さい屋台です」

アダンさんが頷き、王子に戻される。

「王子に仕えてるって、誰かに言ったか？」

うつ、つと言葉に詰まったが、アダンさんが真面目な様子だったので正直に言う。

「肌が黒くて、恰幅のいいお爺さんに。あと直接は言ってますが会話の脈絡から軽食屋の店主さんも気づいたかもしれません」

アダンさんとベルさんが難しい表情を浮かべた。

「ちゃんと説明してなかったけど、王子って呪われてるでしょう、コレを天罰とかいうヘンな人達もいたりするのは知ってるわよね」

ベルさんの説明に黙って頷く。

「あなたが王子の側にいるって言い触らすと、それを悪い事に利用しようとするかもしれないから、本当は黙ってて欲しかったの」

「しかも、今へびだしな」

「美味しいのにね」

嘆息するアダンさんに、残念そうなベルさん。



困惑した表情を浮かべていたのか、クッキーを食べ終わり真面目な表情のエリアスが口を開いた。

「帝国側、特に教会派にとってはヘビやドラゴンは嫌悪すべき対象です。半身とはいえヘビの姿の王子が世継ぎだと、国民に無用の動揺を与えかねません。」

また収穫祭までにこれから帝国からの使者や他国の大使なども大勢いらっしやいますから、軽はずみな行動は慎んでください」

「はい。ごめんなさい」

素直に謝ると、エリアスがうんうんと頷いた。

眼鏡がずり落ちそうになるのを慌てて押さえ、口元を和ませる。

クッキーついてる。

「確かにあなたは浅はかな部分が多いですが、その能天気な部分で随分と救われるという人もいますので、今後は気をつけてください」

褒められたのか貶されたのか悩みつつ頷き、王子に視線を戻すと王子は一心不乱にクッキーを食べていた。

「…王子？」

恐る恐る声を掛けると、王子ははっとしたように手を止め、決まり悪そうにした。

「大丈夫だ。毒は無い。アダン、悪いが、陛下にも差し上げてくれないか。これ、父上は好きなんだ」

今度は、もっとたくさん買おう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8072y/>

---

呪われてる王子様。

2012年1月8日23時56分発行